佐々木承周老師の 100 歳記念

　このエンブレムは杏山承周老師の記章である。5 つの花びらは、杏の花である。（老師の道号である杏山は、杏の山という意味である。）中央の４つの四角形は佐々木家の家紋である。金色の線と中央が赤くなっているのは、教えの豊かさと輝きをあらわしている。

著作権の表示：宗教法人臨済寺
印刷：アメリカ合衆国イサカのカユガ・プレス
デザイン及び制作：ペーパームーン・デザイン

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
伝記などないね・・・・・・・・・・・・・・・・・3
インタビューに先立って・・・・・・・・・・・・10
老師の禅の教え・・・・・・・・・・・・・・・・・15
百年目の年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
臨済寺の和尚たち・・・・・・・・・・・・・・・43
臨済寺とセンター・・・・・・・・・・・・・・・49
これまでをふりかえって・・・・・・・・・・・・61
逸話・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
承周老師の偉業をたたえて・・・・・・・・・・85
臨済寺の運営委員会委員長のメッセージ・・・87

「諸君が修業の情熱を抱き、真理を明らかにするために努力して歯をくいしばる情熱を抱くなら、そうしたら私も、諸君全員とともに、強い意志をもって死ぬまで提唱と参禅を続けるつもりである。」

このアルバムは、佐々木承周老師の 100 歳の誕生日と、アメリカでの禅の教化の 45 周年を記念して出版されたものである。

左
三浦承天老師。妙心寺の第 23 代管長で、承周老師の師匠。1871 年～1958 年。

右
盤龍禅礎。三浦承天の師匠で、承周老師の法祖父にあたる。1848 年～1935 年。

「昔の師家方の影（訳注：教化のことだろう）に心うたれて分かったことは、自我の滅却である。いまや自我の滅却から目覚めてみると、さあ、真の師はどこにいるのだろうか？　去来自由にして、完全な寂滅とともに動く。しかしそれでもなお、私自身は寂滅の中に到らなくてはならない。さて、何ができるのか？」

2007 年 3 月 6 日　承周老師

老師による解釈
「私の師は承天宗杲である。承天の師は盤龍禅礎である。今この盤龍の写真を手にして、敬服と悔恨の念が窮まる。」
「敬服と悔恨がないまぜになった感情がこみ上がり、そこから我にかえると、私の真の師に思慕の情を寄せる。」
「そして天地をすべて探しまわって、見つけたのは寂滅である。再び我にかえり、真の寂滅に到らねばならないと強くわかると、修業の至らなさに対する自責の念で胸がいっぱいになるのである。」

老師の更なるコメント
「この種のことを話してくれといわれると、胸がはりさけそうになり何も話したくなくなる。人々はそんなことは知らずに、なぜ私がそれを話したくないのかという理由について考えることもなく、私の話を求め、聞きたがる。その反対に、私はその人のラブストーリーを聞きたくはない。人はみな、互いにラブストーリーを聞きたがるが、しかし、実はそれは語るようなことではない。それは本当に心が張り裂けそうなことだ。ラブストーリーは最も悲しい話だ。ここに詩が成立する。ラブストーリーは詩になる。それで十分だ。ラブストーリーは声高に語るものではない。」

１ページ

はじめに

45 年前、禅の智慧の洞察力を秘めた小柄な日本人の男が、合衆国に彼の信条、すなわち智慧そのものを根付かせるまでは死なないと誓ってやってきた。この人物と彼の誓いの恩恵をうけた人々が、老師がこの世に生をうけて 100 歳になったことを祝うために集まってきた。このアルバムは、彼の共同体すなわちサンガから、その師、即ち仏徒の宝となった人への感謝の印である。

宗教上の師に対して（私たちが）負う、感謝すべき恩恵は計り知れず、また恩返しができるものではない。それはなぜなら、より深い次元の存在が示されるとき、それに対して報いる方法はこの世界には存在しないからである。そうではあるが、やはり、我々は佐々木承周老師にお辞儀をするのである。彼は 100 歳になっても、高座にのぼり、聞く耳をもつ人々、見る目をもつ人々、知る心をもつ人々を招くのである。

編集者は、お力添えをくださった以下の方々に感謝します。熱心に翻訳をしてくださったアライ・フサエ、老師と臨済寺のメンバーのいい写真を提供してくれたジョウシン・ラディン、老師の年譜を作ってくれたジョシュ・スイラー、アドバイスとユーモアをくれたグレン・バーネイ、和尚に関する記事の素材を構築し編集してくれたクシン・ミシェル・セヴィック、鋭い観察眼のパルハム・アルジャド・イェシャリーム、校正をしてくれたデイヴィッド・シャロウェイとケリー・モリス、デザインと制作担当のレスリー・キャルレとアンネ・キルゴーレ、記事や写真に貢献してくれた和尚の委員会と、臨済寺メンバーのたくさんの和尚、そして、このプロジェクトを支えてくれた臨済寺管理委員会です。

２ページ

伝記などないね

老師の伝記をかくということは、つまり、物理的な世界における、彼の肉体におこった出来事を書くということは、システィーナ礼拝堂の床のタイルを書くようなもの、モナ・リザの額縁を称賛するようなものである。老師は、禅の本質を教化することに人生を捧げている。彼の人生の出来事は、彼の教えがつまっている袋のようなものにすぎない。

「伝記などないね。」座って尋ねると、老師はそう言う。

承周老師は 100 年前、宮城県の仙台の近くの農家に生まれた。13 歳のとき、3 歳年上の、一番歳が近かった兄が亡くなった。老師は兄と歳が近かったので、87 年がたっても、なおその兄のことを思い続けている。

（兄の）死は若き承周に深い衝撃を与えた。死は難しい問いかけを惹起した。「なぜ神様はこのように無理やり、思うままに人を取り去ってしまうのだろうか？」「本当に神はいるのか？」承周は言う。「兄が死んで、もう神を信じられなくなった。」

老師はかつて、幼いころの記憶を思い起こしていた。「母が死んだらどこに行くのだろうか、私は何回も考えた。父は死んだらどこにいくのだろうか、何度も疑問に感じた。」

このとき、承周は公立の学校にいった。家全体の料理や掃除などの家事をするために、老師は毎朝学校に遅れてきた。老師は成績がいいとはいえなかった。音楽や歌、数学でいい成績をとった。

3 ページ　写真　注
老師が生まれ育った農家

このことは、素晴らしく鳴り響くような看経を聞いたり、あるいは 0, 1, 2 という数字やプラスとマイナスということについての説法を聞いたことのある修行者なら、何も驚くことではない。（「１＋１は？」老師があるとき数学の教授をしている僧侶に尋ねた。僧侶は「2 です」と答

えた。老師は「0 だ」と答えた。）

承周は兄の死について、「あの子は天国に行ったのだ」と言われた。老師はこの答えを受け入れることができなかった。14 歳という多感な歳になって、老師は学校を去り、瑞龍寺に入った。

瑞龍寺は日本北部にあり、仙台から 500 マイル離れた北海道の札幌にあった。瑞龍寺の師家は三浦承天宗杲老師で、後に日本で最大の臨済宗本山である妙心寺の管長になった。

若い見習い僧は、到着してほどなく、住職に質問された。「ブッダは何歳か？」承天宗杲は尋ねた。

洞察力が既に深まっていたのだろうか、あるいはものすごく大胆だったのか、承周は答えた。「ブッダは私と同い年です。」

師は答えて言った。「こいつはもう坐禅修業する準備ができておる。」

老師は見習い僧としての最初の一か月におこったエピソードをもうひとつ教えてくれた。ある日、老師は寺の建物の中を掃除していた。すると雪が降り始めた。雪は北国有数の町である札幌では珍しくない。その日、承周は窓から雪が降るのをみていた。雪は窓ガラスに降りつくと、溶けてなくなった。雪はどこから来て、どこへ行くのだろうか、老師はこう疑問に思った。科学的な観点ではなく（即ち、熱が水分子の結合を解いて、といったようなことではなく）、体験的な観点から、老師は疑問を発した。私がみているこの雪の粒、私が愛し失ったこの家族、それはいかなる起源をもち、どこに去るのであろうか？

承周老師は 21 歳に和尚に得度された。恭山（訳注：後に「杏山」に改める。）という名を頂いた。そして 20 年間、京都の妙心寺で修業をした。（訳注：妙心寺には、1935 年から 1937 年の 2 年間のみで、1953 年に正受庵に晋山するまでは瑞巌寺で修業。）1947 年、40 歳のときに、老師としての資格を得た。1953 年、飯山の正受庵の住職となった。正受庵は修理がされておらず、廃寺同然だった。

正受庵はかつて、白隠の師である道鏡慧端が住持した。白隠は恐らく、臨済宗でもっとも有名で広く愛されている禅師である。18 世紀の始め、白隠が教化を始めたとき、臨済宗は衰退の一途をたどっていた。白隠が坐禅と公案の修業に強く焦点をあてて、（宗門が）息をふきかえしたのである。これは老師が今まで続けてきたアプローチであり、老師はこのタイプの教化を行っている師家の一人である。

承周老師の修行者たちは、日本で若いころの老師がどんな風だったかとか、老師の指導の厳しさや訓練について話してくれる。また老師門下の若い僧侶たちは、老師が（目の前を）歩き過ぎるとビクビクするといったことを話してくれる。

老師は正受庵で 10 年間過ごした。

4 ページ　挿絵　注

達磨（菩提達磨）　三浦承天老師画。承周老師の師。

4 ページ　文章

迷いの雲が晴れると、最も暗い洞窟の中でもキラキラと輝く。

1962 年の初め、南カリフォルニアの 2 人の禅の修行者である、グラディス・ワイズバートとロバート・ハーマン博士が禅の師家を派遣してくれないかと妙心寺に連絡をよこした。老師が選ばれて、1962 年 7 月 21 日にロサンゼルス国際空港に到着した。老師は 55 歳で、海外は初めてだった。ほんの初歩的な英語しか知らず、両袖に辞書をいれていた。右袖は和英辞典、左袖は英和辞典だった。

老師はハーマン博士のガレージに住んだ。ほどなく、ガレージは禅堂につくりかえられ、老師は直日、聖侍、典座、殿司として働いた。夜は、彼の家となった。それから 6 年以上、修行者の集まりは老師を中心として大きくなっていった。立ち寄るには場所が不便で、禅堂は何回か場所を変えた。しかし、さらに多くの修行者がやってきた。1967 年に、老師は最初の 7 日間の大摂心を主宰した。

1968 年、現在、臨済寺禅センターが入居する建物を購入した。建物は荒れ果てていて、ロサンゼルス市当局は居住禁止としていた。たくさんの労力をつぎこんで、老師の修行者は建物を一新し、その年の 4 月 21 日、老師の 61 歳の誕生日にシマロン禅センターとして開設となった。

センター（のメンバー）は急速に拡大した。修行者や来客が滞在するための建物を、近くにもう一軒購入した。そして、1970 年、クレアモント出身の老師の修行者で、現在は和尚であるショウザン・マーク・ジョスリンが、ロサンゼルスの東のサンガブリエルの山地に古いボーイスカウトのキャンプ地を偶然みつけた。そこでの最初の摂心は 1970 年に行われ、続いて春には正式にマウント・ボールディ禅センターとなったのである。

アメリカ人は、個人が何事かを達成することを何よりも重視し、経済的・家庭的・心理的な充足を求めなくてはならないと考えているが、そんなアメリカ人を教化するにあたっては、常にいろいろなことを考えなくてはならないと老師は言う。老師が日本で見知っている世界は（アメリカには）ない。老師は自身の教えをアメリカ人にあわせて調整した。「結婚したなら、それは真実だ。」老師は教える。「子供がうまれたなら、それは真実だ。あなたの生を何かしら障害として拒絶してはならない。そうではなく、あなたの生とは真理を明らめることと認識しな

さい。」

45 年間、老師はアメリカに住んで数千の修行者を教化した。老師はいくつかのセンターを監督した。そのうちのいくつかは、アメリカでも有数の、荒涼とした、美しい景観に恵まれたところである。このような発展は、両袖に辞書をいれてロサンゼルス空港に到着したときには思いもしないことだった。インタビューで老師はいった。「私は 5 人か 6 人の、心から禅の人生を生きる人ができることを考えていたし、そうなるだろうと思っていた。寺やセンターを建てる計画などなかった。」

現在、老師は 3 つの主要なセンターで修業を指導している。臨済寺、マウント・ボールディ、そしてニューメキシコ州ジェメス・スプリングスのボーディ・マンダラ禅センターである。それぞれのセンターに、（それぞれに独特の）性質と慣習、そして挑戦がある。例えば、臨済寺は、今では近隣住民とは良好な関係を保っているけれども、大摂心は銃撃の音で中断されたものだった。（訳注：映画の撮影のことを言っている。）

6 ページ　写真　注

老師とジミー・ヤマモト。彼は、アメリカでの最初の 10 年間、老師の通訳をした。2001 年に再会し、ヤマモト氏は 88 歳になっていて、こう言った。「私は人生最後の数年間を楽しんでいる。老年は長くは続かない。人類の智慧と私の行く先を教えてくれた老師に感謝します。」

１人の僧侶が臨済寺での最初の大摂心のことを思い出して言う。「午前 3 時に起床のベルで目を覚ます。外ではヘリコプターが近所の上空をグルグル飛び回りながら、大声をあげている。「手を頭の上にのせて建物から出てこい！　手を頭の上にのせて建物から出てこい！」私は思った。「うわあ！　ここにはすごい聖侍がいたもんだ！」

マウント・ボールディでは、その環境にたちむかわなくてはならかった。僧侶と居住者は、過去十年間に何度も施設から退去しなくてはならなかった。山火事や冬の嵐が原因だった。雪は１時間で 30 センチも積もることがある。老師の部屋は 14 年間も水道設備がなかった！

ボーディ・マンダラの組織は、老師の人柄であるちゃめっけたっぷりのユーモアで始まった。1970 年代はじめ、ミッシェル・マーティンという名前の修行者がニューメキシコで大摂心を主宰して欲しいと頼んだ。老師はそれに答えて、「温泉をみつけたのか、来るよ」と答えた。マーティンは温泉付きの古いカソリックの修道院が売りに出されているのをみつけると、老師は約束通りやってきて、それ以来、ここに来続けているのである。

何年にもわたり、老師はカナダ、ポーランド、ノルウェイ、オーストリア、ドイツ、スペイン、ベルギー、プエルトリコ、そしてニュージーランドで修行者たちを参禅させ、また提唱をしてきた。老師は 100 度の暑さ（訳注：華氏 100 度。37℃ほど）や、南国の台風の中でも、6 フィートの雪のところでも、摂心をした。肺炎と気管支炎を患いながら摂心をし、胆石を取り除いた一週間後にも摂心、心臓にステント（訳注：閉塞した血管を拡張させる手術に使われる医療器具）をいれるための手術の 1 週間後にもまた摂心をした。夜に激しい痛みを訴え、緊急処置室に入れられたが、朝には最初の参禅に戻ったのであった。

最近になって、ベトナム戦争が最も厳しい状況となって、修行者が社会のありように疑念を抱いてやってきた時代、60 年代や 70 年代に比べると、新しい修行者の数は減ってきている。世の中は、苦しみとは何なのかを探っているという事実がある一方で、これまでとは違う傾向であると、老師はみている。それでも、老師は（自身の務めを）継続する。

7 ページ　写真　注

老師と、古くからの友人と支持者。（左から）ダン・スナダ、マーシー博士、そしてハーマン博士。1962 年に老師を合衆国に招いた人々。

100 歳になって、スケジュール表を満杯にして教化し、少なくとも月 1 回の大摂心をし、それもたいていは 2 回で、1 回の摂心毎に 1 回の提唱と 4 回の参禅、だいたい 40 名の参加者がいるのである。

寄る年波は何事かを持ち去ってしまう。鬼気迫る若い老師は円熟した。1 世紀を経た膝は、若さという蓮に満ち溢れる（ほど素晴らしい）状態ではなくなった。老師はいやいやながら酒をやめ、毎日サプリメントをとった。老師は遠くまで歩けなくなった。何年も、マウント・ボールディでは老師の居室から本堂までの数百ヤードを車で移動している。本堂の中に入ると、提唱の前に深々とお辞儀をするときは、副住職に支えてもらっている。しかし、それでも老師は教化をやめない。老師はなおも愛を生み出す人類のあり方を語り続ける。老師はなおも、叱り飛ばし、くすくす笑い、怒鳴り、鈴を鳴らす。いったいどこでそんな力を得ているのだろうか？

老師は答える。「それは絶対性の力であり、愛の働きである。」

しかし、老師はあまりに強く教化しすぎではないだろうか？　老師はやめるだろうか？　どうすれば彼を止められるか？　彼を楽にさせる方法はあるのか？

「ないね。」老師は答える。「もし君たちが修業に対し、教理を明らめる努力をして歯をくいしばる情熱があるなら、そしたら私も、強い意

志をもって、死ぬまで君たち全員とともに、提唱と参禅をつづけようと思う。」

老師は自身の行いに対する感謝など求めていない。これ故に、老師の 100 歳の機会に伝記を書くことが難しくなるのである。老師を称賛したい、（ここで起こった出来事の）全てを牽引したエンジンというべき老師を称賛したい。しかし、称賛などいらぬと老師はきつく言うのである。老師の来歴についてもっと知りたいのに、語ることはないと老師は言う。「伝記が欲しいなら、ブッシュかクリントンをインタビューしなさい。」と老師は言う。「しかし老師、若い僧侶の時、何を考えていましたか？」と聞くと、老師は杖で椅子をぴしゃりと打ち、その音のどこにブッダがいるかと聞くことだろう。

そこに、真の伝記があると彼は言うだろう。

そして、老師は鈴を鳴らすことだろう。

9 ページ　写真　注

承周老師（前列右から二人目）。1962 年ロサンゼルスへ出発する前に。

10 ページ

老師の法系

1．摩訶迦葉尊者（これより西天二八祖）
2．阿難尊者
3．商那和修尊者
4．優波麴多尊者
5．提多迦尊者
6．弥遮迦尊者
7．婆須蜜多尊者
8．仏陀難提尊者
9．伏馱蜜多尊者
10．脇尊者
11．富那夜奢尊者
12．馬鳴尊者
13．迦毘摩羅尊者
14．龍樹尊者（ナーガールジュナ尊者）
15．迦那提婆尊者
16．羅喉羅多尊者
17．僧迦難提尊者
18．伽耶舎多尊者

19. 鳩摩羅多尊者
20. 闍夜多尊者
21. 婆須盤頭尊者
22. 摩拏羅尊者
23. 鶴勒那尊者
24. 師子尊者
25. 婆者斯多尊者
26. 不如蜜多尊者
27. 般若多羅尊者
28. 菩提達磨大師（中国初祖）
29. 二祖慧可大師（二祖）
30. 三祖鑑智禅師（三祖）
31. 道信大医禅師（四祖）
32. 弘忍大滿禅師（五祖）
33. 慧能大鑑禅師（六祖）
34. 南嶽懐譲禅師
35. 馬祖道一禅師
36. 百丈懐海禅師
37. 黄檗希運禅師
38. 臨済義玄禅師（臨済宗宗祖）
39. 興化存奬禅師
40. 南院恵顒禅師
41. 風穴延沼禅師
42. 首山省念禅師
43. 汾陽善昭禅師
44. 石霜楚円禅師
45. 楊岐方会禅師（これより、臨済宗楊岐派）
46. 白雲守端禅師
47. 五祖方演禅師
48. 圜悟克勤禅師
49. 虎丘紹隆禅師
50. 応庵曇華禅師
51. 密庵咸傑禅師
52. 松源崇嶽禅師
53. 雲庵普岩禅師
54. 虚堂智愚禅師
55. 南浦紹明禅師（大應老祖、これより日本）
56. 宗峰妙超禅師（大燈国師、大徳寺開山）
57. 関山慧玄禅師（無相大師、妙心寺開山）
58. 授翁宗弼禅師（微妙大師、妙心寺二祖、妙感寺開山）
59. 無因宗因禅師（妙心寺三祖）
60. 日峰宗舜禅師（妙心寺四祖、妙心寺復興）
61. 義天玄詔禅師（妙心寺五祖）
62. 雪江宗深禅師（妙心寺六祖）
63. 東陽英朝禅師（妙心寺四派のうち聖沢院開祖）
64. 大雅嵩匡禅師
65. 功甫玄勲禅師
66. 先照瑞初禅師
67. 以安智察禅師
68. 東漸宗震禅師
69. 庸山景庸禅師
70. 愚堂東寔禅師（大円宝鑑国師、妙心寺 137 世、妙感寺中興開山）
71. 至道無難禅師
72. 道鏡慧端禅師（正受老人、正受庵開山）
73. 白隠慧鶴禅師（臨済宗中興）
74. 峨山慈棹禅師
75. 隠山惟琰禅師
76. 太元孜元禅師（妙心寺 479 世）
77. 大拙承演禅師
78. 獨園承珠禅師（相国寺 126 世）
79. 盤龍禅礎禅師（瑞厳寺僧堂師家）
80. 承天宗杲禅師（妙心寺 624 世）
81. 杏山承周老師（米国臨済寺開山）

13 ページ

「禅に難しいことは本当に何もない。ただひたすら提唱を聞け。坐禅をして提唱を振り返り、（真の）認識に到る。　そう！　それがまさに道のありようなのだ！」

「私がこの音を出すとき、もしあなたが音の極みにあるなら、すぐにこの音が神の声、ブッダの声であると気づくことができるだろう。坐禅修業はこの音を刺し貫くことであり、この音が真実であると知ることである。この音を聞くとき、もしくは花を見るとき、神とともに、ブッダとともに見て、聞くのである。」

15 ページ

承周老師とのインタビュー

はじめに（インタビューのための導入）

このアルバムは、承周老師への賛辞であり、また現実の本質である法の教化への、老師のやむことなき情熱への賛辞でもある。このアルバムの意図するところは、写真や物語を含めて彼の伝記を表すことであり、また、老師の教化とその存在の恩恵に浴するために集まってきた人々に感謝するためでもある。しかし、このアルバムが真に老師に対する賛辞であるならば、老師が生涯を捧げたもの、つまり法の教化そのものがこのアルバムの内容でなくてはならないと、老師は言う。

老師に、今後のことについてのインタビュー、対話をしてくれないかとお願いした。修業期間中に行う正式な講義である提唱ではなく、形式が堅苦しくない何らかのやり方で、もっと親しみやすいようにと思った次第である。老師はいいと言ってくれた。2006 年の 12 月初め、２日間にわたり６時間、老師と話をした。フサエ・アライが通訳をした。

インタビューのすぐ後、老師はマウント・ボールディ禅センターの冬の修業期間を主宰し始めた。老師に読み返してもらって、翻訳が正し

いかを確認してもらおうとした。しかし、制中のただ中で、インタビューの導入部分の（老師の教えの）要約の正しさを確認してもらう時間はなかった。（また）インタビューのテープのチェックをしたが、やはり間違いはあるだろう。この点につき謝罪いたします。（しかし）もし冬の制中がおわり老師に時間がとれるのを待っていたならば、このアルバムは老師の 100 歳の誕生日に間にあわなかっただろう。

老師の教えの言葉や隠喩は、何年も坐禅し老師の提唱を聞いた人なら耳慣れたものだが、しかし、それ以外の人には頭を混乱させるものだと、いつも老師は言っている。こうした古くからの修行者には、老師の教えとその指さす処を明らめるために坐禅と参禅をする機会がある。このアルバムは、（法を）言葉で記述するというスタイルになじみのない読者に道を示すためのものなので、この導入部分を説明として記述するものである。

仏教は目覚めの宗教であり、目覚めへの道を教導するものである。老師は、目覚めとは自己が心の働きであると同一視することからの目覚めであると老師は指摘する。そしてそれは、自己の真の本質を直接見るということであると言う。

彼の教えでは、人々が自我を取り上げて自我だと思っている、個人たる自我というもの、即ち「私である」という自我は固定したものではないというところへ、常に立ち返らなくてはならないと説かれる。それは常住の当体ではない。それは「真の」自己ではない。それは諸々の条件に応じて惹起する不完全な自我である。ではこれらの条件とは何であるか？　主体と客体は元来統合されており、故に自己と宇宙とは元来ひとつであり、故にこのような統合は万物があらわれる根源（訳注：”foundation”は以下頻出する。主体と客体などの、見かけ上の二項対立が統合された、無もしくは空の総体を指す。以下同じ。）なのである。すべての個人たる自己とは、物質的な現れとしては、統合という根源から立ち現れるのである。だから、自己が完全に世界と分離した、独立して存在する主体であるという見方から生を関連付けると、このような考えは誤りであり、このような観点にたった考え方すべてが、問題多く、不満に満ち溢れたものになるだろう。

老師はあれこれといくつかの隠喩を用いる。それぞれの隠喩は、なんらかのニュアンスを含んでいる。（例えば）本来的に統合されているということを述べ、男性の働きと女性の働き、プラスの働きとマイナスの働き、主体の働きと客体の働き、夫の働きと妻の働きという。老師の教えによると、元来統合されているというこの上なき見方が晦まされてしまうのは、主体としての自我が独立した存在であると、何の疑いもなく思い込んでしまうことによる。そうではなく、主体的な自我というのは、経験を解釈するという心の働きであって、（それが真実なのかどうか）一歩ひいて検証などしていない代物にすぎぬ、そのように理解せねばならない。このような間違った認識を正すために、老師は我々に経験を熟視し、明確な洞察力を得るように促す。また、老師の教えによく出てくる言葉に、「働き」がある。固定的な存在はないし、真に独立した自己はないから、老師は事象を働きと呼ぶ。例えば、神と直接つながる働き、生きる働きと死ぬ働き、空の働き、心の働き、生まれ

るという働き・・・。こういう表現は、経験ということは完全に流動的であることを強調し、また、見かけ上存在するように思われる主体の、無我の本質を指摘するのである。

修業を始めたばかりの人は、これまでにこのような無我という教えを聞いたことはない。講和机を朱扇でたたきながら、老師は修行者たちをこの（無我という）教理に招き入れる。そして問いかけるのである。「この音をきいているとき、諸君はどこにいるか？」修行者たちはこれまで当然のように、私はこっちにいる、音はそっちからする、と考えているが、今やそこに疑義が入るのである。修行者の修業が成熟してくると、客体として現れる世界は、知覚する主体と関連付けられていて、自己は（主体と客体の）どちらでもなく、（主体と客体の）どちらでもあるということが分かり始めるのである。

主体は、五感と心を通じて、客体を経験する。そのそれぞれにおいて、老師が「私は自我である」と呼ぶものは、経験の心的な解釈であり、そのような解釈によって、目の後ろからみえるところ、耳の内側から聞こえるところに自我が位置づけられるのである。しかし、よく感覚を精査するならば、そんなふうに自我を位置づけることはできない。目の内側にあるのは客体の映像を結ぶ網膜である。そこに実体はない。同じように、聴覚と全ての感覚についても、感覚器官は常に客体の像を結ぶのである。感覚の客体と感覚の器官が統合される。穏やかな、明瞭な禅定（訳注：introspection）によって、感覚の中の独立した自我など存在しないことがわかるのである。

老師がインタビュー中で言っているが、夢の性質について考えてみると、心は世界（つまりは夢）と一体となっているが、次第に「私は自我である」という思いが夢の中で主体として居場所をみつけてしまい、外側にあるとみえる夢の客体が全て、（実は）主体と本来的にひとつであるという明白な事実が無視されてしまうのである。

智慧により生まれる慈悲において、仏教は個人の自己を認め、これを真実であると指摘するが、あくまで仮のことだと、老師は説く。自己であるものと自己でないものという不完全なものの見方からこのような考えが生じる。このような考え方が無条件的におこるのではなく、元来ひとつのものが、ふたつの働きに分割された根源でおこるのである。しかし、現実には分割された実体はないのである。

しかし、このふたつの働きはどのようにして「私は自我である」という思いを生じるのであろうか？　この統一された根源はどのようにこの世界に「開かれて」いるのであろうか？　この根源、もしくは源泉は、これらふたつの働きによって構成され、分割と統合を繰り返すという性質そのものであると老師は説く。ふたつの働きが統合されると、主体と客体、プラスとマイナスがひとつになる。老師はこれを「無」の地平と呼ぶ。なぜなら、統合されたとき、プラスもマイナスもなく、滅却し統合するからである。この統合は、固定された地平ではないと、更に説明を続ける。統合は必ず崩れる。なぜなら、分割し互いに反発するのがふたつの働きの性質だからである。分割したとき、ふたつの働

きの間に隔たりができる。

「ふたつの働きが分割されるとき、プラスとマイナスは、それぞれ同じ量ができる。そして、プラスとマイナスの僅かな量を得て、現れるのは、今話している隔たりである。この隔たりは限定された空間であり、（全てを含む）空の空間である真の宇宙とは全く対照的である。これ（隔たり）は空の不完全な働きであり、空の空間を限定することによって現れる。この隔たり、この空間は全ての人が持つ「私である」自我の始まりである。これが仏教の教えである。」このように老師は説く。

即今ただ今、客観的世界として体験しているものが、（実は）マイナスの教理のほんのわずかの量（時に 0.0000000001 という）にすぎず、それが現前の無限大であると、このように老師は気づかせようとする。同じように、即今ただ今、主観的世界として経験しているものが、プラスの教理のほんのわずかの量にすぎず、それは現前の無限大を通じて主観的な体験を明らめる教理である。そして老師はこのふたつは常に同時に起こり、その源泉において統合されるのであると説く。

ちょうど、夫と妻が統合され分割されて子供が生まれるとき、ここにも二人がふたつの働きの分割の中に、子供（「私である」という自我）が生まれる。この子供はふたつの原則の間の見かけの隔たりのなかにいる。子供は「両親」をみる、つまり主観世界であり客観世界であり、内に主体的な存在を、外に客体的な存在を知覚する。「私である」という自我は、自己の源泉である統合された根源を見ることはできない。単に、ふたつの働きの、主体・客体に分割された性質を見るのみなのである。

自ら成らしめる自我、この個人の自我というのは「不完全な自己」であると、老師は何度も何度も繰り返す。全ての個人の自我は不完全な自己であり、個人の自我の本質は、自己の源泉から現れ出るのである。

「私である」自我が生まれると、生の働きをはじめ、プラスの働きを拡大させると、老師は説く。プラスの働きの拡大は、「究極的に大きな」世界を明らめることで最高潮に達すると、老師は述べる。その時点で、自己が、宇宙全体から生ずる万物が、宇宙と一つとして生起するものであると気づく。老師はこれを、プラスがもはや拡大することのない地平、主体と客体、夫と妻が統合される地平と呼ぶ。老師はまた、これを心の働きの痕跡がまったくない地平であるという。

それは「比較を越えた」地平であり、「完全な安息」の地平である。なぜなら、その地平の外側には何もないからである。それ以外のものは何もないからである。老師はまた、この地平を「真の神」と呼び、「真の愛を明らめること」と呼ぶ。人間の世界では、愛する者との完全な愛を模索する。「究極的に大きな」ものは確かな統合なのである。

しかし、これはまた、固定された地平ではない。この地平は主体と客体に分割され、互いに反しあう。しかし、新しい主体、新しい夫が「究

極的な大きさ」の経験から現れ出る。主体と客体の統合という経験をしていなくても、それにもかかわらず、統合を見つめ返して、妻（客体宇宙）が、今は隔たりがあるけれども、自己とひとつであると知っているのである。老師は、ここで妻がどのように主導的になり夫が従うのかと、美しいイメージで語る。妻との統合の経験をした後、夫の意志は妻とともに流れることであり、状況（妻）と完全に自在に動き、妻が究極性を明らめることであると知るのである。

「究極的な大きさ」の世界を経験すると、もはや自己肯定や生の働きを行う必要はないし、その重要性もなくなると、老師は説く。「私である」という自我の根源はわかっている。そして夫は妻とともに自分たちの源泉にいき、二人とも死の働きをする必要はなくなる。言い換えると、自我は根源的に空であるから、もはや自我を否定する修業をする必要はなくなる。

以上、老師の教えを手短に要約したが、これが、この後のものすごい教えの理解の手助けになればと思う。

どうか、師家の教えを通して、人生を見返す良い機会にしてください。

老師の禅の教え

初日

老師：聞きたいことがあるんだって？　君は僕の伝記を書きたがっていた。しかし私の人生に伝記はないよ。このことは最初に言っておきたい。

質問：最初は、あなたの人生についてインタビューし、アルバムの中心的な記事にしようと思っていました。しかし、その後、老師の個人的な来歴について議論すると、老師の時間を無駄にしてしまうと思いました。そこで代わりに、老師の教えをアルバムにしようと思いました。このようなインタビューならよろしいでしょうか？

老師：よろしい。君は私のところで坐禅をしているね。君が自分自身で仏教を理解しているところから質問してくるなら、質問に答えよう。

いいよ。

質問：はい、質問は２種類あります。ひとつは質問、もうひとつは老師にお話をしてもらうためのきっかけを提供することです。

老師：ああ。

質問：そしてまた、始める前に、このインタビューに応じていただき、時間を割いていただきありがとうございます。最初の質問ですが、老師とは何でしょうか？　老師は、普通の人間が見ない、知らない何事を見て、知っているのでしょうか？

老師：難しい質問だね。どんな質問であれ、いったいどこから出てくるんだ？　自我が生起しないなら、いかなる質問もブクブク出てきはしない。そうだろ？　どう思う？
この世界に生まれて、生きねばならない。しかし、心の働きがどこからくるのか弁えずに、この生まれついた世界、生まれた自分の本質を眺めるなら、その質問に答えるのは難しい。それゆえ、もしこの人（訳注：質問者）が本当に禅を学んでいるなら、質問をする人が私自身であると気づいているかどうか、気になるね。
老師は禅の世界の肩書であり、親しみを込めた呼び名であり、「年老いた人」を意味する名前である。そして老師は他でもない、他の誰とも同じく、生まれた存在という働きと合致して生まれたのである。生にはふたつの見方がある。私たちの誕生には二つの考え方がある。ひとつは生ましめたという働きと合致することと、もうひとつは生まれたという働きと合致することである。いうまでもなく、「私が生まれた」というとき、「誰が生んだのか？」と問わなくてはならない。つまらぬことと思うかもしれぬが、実は意味深長なことである。
もし、「あなたの両親は誰ですか？」と聞かれたら、誰もが、「私の両親は父親と母親です。」と答えるだろう。ここで考えを深め、宗教を学ぶ人が、両親は神である、または神の乗り物であると考えるとしよう。恐らく、こういう結論になる。父親と母親は両親ではあるが、両親は神でもある。だから、そういう人は、誕生のときも、人生ののこりも全部、私たちが神とつながっていると考える。

質問：「神」という言葉で、老師は何を意味していますか？

老師：それは徐々にやってくる。質問者は神についてどのように考えている？　今いったとおり、神からうまれるというのはひとつの考え方だ。神と自己が直接つながっているという考えだ。神とは何か？　人は神と直接つながっているから、神によって生を授けられたとしか考えることができない。この考えを広げると、疑問は次のとおりとなる。「どのような種類の働きによって、神はこの世に生を与えるという働きを完結するのであろうか。」さあ、これで質問の答えになっているかな？

質問：「神によって」、（訳注：主体と客体が）分離されていると老師は仮定されていないと思っています。

老師：神と自己が直接つながっているという考えがあるならば、この自己が神とどのような関係にあるか考えなくてはならない。神を無条件的（訳注：unconditionally、無常の理の及ばないものとして神や自我が存在し対峙すると考える誤謬を老師は「無条件的」という用語を使って批判する。以下同じ。）に考えるのはよくない。誰もが無条件的に神を認めるが、しかしそれは仏教の観点からは完全に間違いである。神とは何か？　神と自己との問題について検討するとき、もし神と自己とが直接つながっていると考えるなら、それでよい。しかし、それ以外の答えは神を無条件的に認めてしまっている。
「直接つながっている」というとき、「直接つながっている」という働きを行うことによっている。神と自己とが直接つながっているとき、「直接つながっている」という以外の答え方はない。直接つながっているという考え方をしないならば、「神は愛である」とか「神はこれこれである・・・」といった、他の考え方になるだろう。それゆえ、「私たちは神と直接つながっている」という答え以外の、無条件的に心の働きを認めるという考え方はすべて、仏教が強く批判するものである。人々は心の働きを無条件的に認め、そうするとすぐさまあれこれと話し始めてしまうのである。
人類は神と直接つながっているけれど、神と距離をおいて人類の地平にたつときがある。それは「私である」という自我がうまれた後に起きる。「私である」という自我が生まれない限り、神と直接つながっている。それゆえ、仏教では神と引き離されると、人類の地平があらわれると説く。
恐らく、人々は神が人類の地平をどのように起こすのかと疑問に思うだろう。神は絶対的な存在で、神は子供たちを生みだすのに外部の物質をもってくることはない。もし神が子供たちや生活する場所をもたらすために（外部から）物質をもってくるなら、それは真実の神の働きで

はない。仏教は、神がふたつに分割することによって子供たちを生み出すと説く。

21 ページ　文章
人類は神と直接つながっているけれど、神と距離をおいて人類の地平にたつときがある。それは「私である」という自我がうまれた後に起きる。「私である」という自我が生まれない限り、神と直接つながっている。

22 ページ　文章
君が一所懸命坐禅しているのは知っている。君は泣き、私は泣き、君が一所懸命やるのはすばらしいことだ。しかし、君はまだ平べったい坐禅にとらわれているね。君は内側や外側から生み出されているぞ。丸い坐禅を理解しなさい。二項対立に執着していると、これは理解できない。

ここでまた疑問がでてくる。神がふたつに分つというとき、いったい何が分けられるのか？　絶対的な存在、神は既に、その中にふたつの働きを含んでいる。そして、「私は神によって生みだされた」という考えと、「私は神から生まれた」という考えと、ふたつの相反する働きが私をつくりだしたという事実、これら全てが同じ考えになるのである。難しいところだし、質問をしてくるといい。質問があるなら、尋ねなさい。

質問：自己が独立した存在であるという考え方は、老師はこれを絶対的存在、「神」との根源的な交わりに対する障害と考えていますが、人類はそのような考え方に最も誇りをもち、意味があると思っています。この点において、老師と人類との違いがあると言って間違いないでしょうか？　人類の自我は大きな誇りの源である一方で、自我は神からの分離を意味するので、老師がおっしゃる自我というものは苦痛に満ちたものなのでしょうか？

老師：そういう考えは、「子供は神がふたつに分離して生まれる」ということをよく勉強してからのほうがいいね。ちょっと早すぎる。私の回答はそんなに的外れではないよ。今言うことは、自己とは心の背後にある心の働きをもつということだ。

生まれた、あるいは生み出された自己、そして自己が成長していくプロセスがどのようなものかについて最初に話したい。誰もがそのプロセスをふんだのであるが、しかし、そんなことは気付かず、「私である」自我を主張しがちである。それで苦しみがおこる。生まれた自己は固定されることなく、必ず成長すると、仏教は説く。ここにおいて、私たちはこの成長について注意深く学ばなくてはならない。また、真実の存在のありようはどのようなものかを問わなくてはならない。ついてきてるか？　つづけようか？

質問：このような譬えは比較対象としていいでしょうか？　誰かがやってきて、「夢をみたいが、どうやっていいかわからない。どうやったら夢をみることができるか、教えてほしい。」といって、「そうだね、夢をみるためには、君は自己をふたつに分ける必要がある、そうすると、客観的経験をする自我があらわれるよ。」とその人に答える。これは老師が言わんとするところの正確な隠喩でしょうか？

老師：それは夢の話だね。確かに、人の経験の仕方というのは夢の話のようなものだ。確かにそうだね。人の存在の仕方は全て固定されていない。全て夢のようなもの。だから「夢の如し」とよく言う。人類は「夢の如し」を現実と思い、書き留めておこうとする。夢を記録しようとする。これが人類の振る舞いだね。どれだけ記録をしても、記録が現実になることはない。どうしても目覚めて気づくことになる、「ああ、夢をみていた」と。どうしても夢から目覚める、どうしても夢を忘れることになる。目覚めるとすぐに、もう夢を忘れている。夢は夢にすぎない、現実ではない。
それゆえ、ここで君と会っているというのも、また夢のようなものだ。どうしても、別れなくてはならない。

23 ページ　文章
人類は「夢の如し」を現実と思い、書き留めておこうとする。夢を記録しようとする。これが人類の振る舞いだね。どれだけ記録をしても、記録が現実になることはない。どうしても目覚めて気づくことになる、「ああ、夢をみていた」と。

誰もが夢を見る。良い夢でも悪い夢でも、誰もが夢は夢にすぎず現実ではないと知っている。「良い夢」と「悪い夢」というから、夢は何かしら現実であると考える人々がいるかもしれない。しかし、夢は常に消え去る。

質問：夢が意味するところを語って、一時間 250 ドルを受け取る人たちがいます。

老師：それはいいね！　夢をみることと、250 ドルうけとること、重くもないし軽くもない。それは夢の話のようだ。仏教は夢をみることをとりあげる。誰もが夢をみる。疲れて熟睡するときは、夢を見ない。それは心のいたずらな働きである。眠っている時、ある心の働きが起きる。これが夢である。それは現実ではない、そして、それが仏教の教えである。今日、心理学が流行っているから夢を語るには時間がかかる。しかし、仏教が夢を認めても、夢を心の真の働きとは解さない。そして、心の真の働きでさえも、夢のようだと説く。
時間はかかるが、しかし修業すれば、誰もが夢をみるが、夢は現実ではないとだんだん理解するだろう。仏教は、人類が夢のようなものであると結論付ける。生まれた自我は、私が生まれたという事実は、真実である。しかし、この自己がどのように生の働きに執着しても、生の地平は生の働きの中で決して固定化されることはない。
ここで疑問がおこる。どのような種類の働きが、生の働きであるか、そして、どのような働きが、死の働きであるか？　先頃言ったように、神はプラスの働きとマイナスの働きの両方を含む存在である。神の中では、プラスとマイナスが真実の、完全なる地平において統合されている。それはプラスでもマイナスでもない地平である。それは無の地平である。仏教における完全なる地平である。この完全なる地平ではプラスとマイナスの存在が統合されていると明らめられている。空の働きが明らめられているともいう。人間の世界におけるそのような完全なる地平の例は、幸せな夫婦であろう。しかしもちろん、この地平を知るために結婚する必要はない。
それゆえ、夫婦の地平と個人の地平は異なるがしかし同一であると、仏教では説かれる。夫婦の地平は「賓主一体」（客体と主体の統合）（＊）という。この教えは、客体と主体が必ず統合の地平を明らめ、しかしまた、この統合が固定されることなく、分離の地平を明らめることになるのである。プラスとマイナスが統合されると、完全になる。それらは完全な働きとなるのである。そしてプラスとマイナスの働きが完全な統合にあるとき、世界は存在せず、個人も存在しない。

（＊）訳注：臨済録の「上堂」に、「是の日、両堂の首座相見、同時に喝を下す。僧、師に問う、還って賓主有りや也（また）無や。師云く、賓主歴然。師云く、大衆、臨済が賓主の句を会せんと要せば、堂中の二首座に問取せよ。便（すなわ）ち下座す。」
（この日、前堂と後堂の首座が行き合うと、同時に「かーつ」と一喝を交えた。それを見た僧が師に問うた、「只今の喝に賓主の別がありますか。」師「賓主ははっきりしている。」

「もしお前たちが私の言う賓主の句の意味を知りたければ、堂内の二人の首座に聞け」、と言って座を下りた。）

本文及び現代語訳：朝比奈宗源訳注「臨済録」（岩波文庫）30〜31 ページより

これだけが完全な地平であり、この「賓主一体」だけが真理である。これが、教理の説くところである。統合を明らめることはプラスの経験の働きであり、マイナスを含み、その一方で、マイナスの経験の働きであり、プラスを含む、このように教理は説かれる。
人間世界では、統合の地平が突然こわれることが多々ある。それは悲しい、残念なことだ。しかし、実際には、悲しむ必要はない。なぜか？プラスとマイナスが分離されるとき、プラスとマイナスの間の隔たりである世界が***必然的に***現れる。この隔たりというのが、仏教によると、万物の源泉である。プラスとマイナスが対立し、互いに分離するとき、隔たりがその間に生じる。そして、この隔たりが生じるのと同時に、父親と呼ぶものと母親と呼ぶものがあらわれ、とたんにその隔たりを縮める。それゆえ、プラスとマイナスが分離していても、子供、即ち「私である」という自我は生まれず、真の「賓主分離」（客体と主体の分離）を明らめることはない。これはまだ、「賓主一体」（客体と主体の統合）を明らめているのである。
「賓主分離」があらわれるとは、プラスとマイナスの分離があらわれると同じことである。このふたつが分離すると、プラスとマイナスはともに同じ量だけ発生する。このちょっとした量のプラスとマイナスが発生してあらわれてくる、それが私が今まで話してきた隔たりなのである。真の宇宙は全てを含む空の空間であるが、それとは対照的に、この隔たりは限定された空間である。この隔たり、この空間は誰もがもつ「私である」という自我の始まりである。これが仏教の教えである。
前に言ったように、不完全な空間、隔たりが現れると同時に、父親と母親があらわれる。あらゆる人が無条件的に両親からうまれると説く教えは、恐ろしく間違っているとわかるだろう。

質問：質問してよろしいでしょうか？　老師のお考えを遮りたくはありませんが。

老師：いいよ、いいよ。話が切られたら、それは心の新しい働きを意味する。だから、いいよ。

質問:主体と客体が統合された地平では、そのような地平は精神的な働きが全くない、完全に思考のない地平ということになるのでしょうか？

そこが質問です。

老師 :「賓主一体」のとき、客体と主体と両方が統合されているよね？　その他に、何がある？　何もありはしない。だから、「賓主一体」のとき、分離された世界は消滅すると私は言うのだ。そんなもの（分離された世界）は存在しないとね。「賓主分離」の働きによると、父親と母親と「私である」自己が同時にあらわれる。そしてそれらは過去、現在、未来とよばれる世界として立ち現れる。そしてそれらの過去、現在、未来の世界は固定されることなく、必然的に無の世界へと寂滅するのである。

質問 : もうひとつ質問させてください。禅の修行が主体と客体の統合を理解することならば、自我の精神の働きは完全に主体と客体の従前の統合を崩すことになりますから、唯一の道は、そのような精神の働きを完全に否定することになります。それで正しいでしょうか？　もし自己と宇宙の統合の地平を理解しようとして坐禅をするならば、その地平に到る道は、修行者の精神の働きの死、もしくは滅却になるのでしょうか？

老師 : 否定することでは十分とはいえない。それは寂滅するのだ。君の夫が「ねえ！」というとき、何を考える？分かるか？君の夫が「ねえ！」というとき、君は何も考えないだろう。これが「賓主一体」だ。「ねえ！」「はい！」ほら、隔たりが無くなっている！　心の働きにまだとらわれているから、首をかしげるんだ。心の働きに執着するのは良くない。夫婦のありようには、このような執着がない。完全に自在なのである。いつも新しい自己があらわれる。新しい自己には二つの側面がある。一つは「賓主一体」によりあらわれる自己と、もうひとつは「賓主分離」によってあらわれる自己である。君の夫と握手しなさい。ほら、新しい自己が現れる。そして、「あなた、じゃあね、バイバイ！」というと、ほら、また新しい自己が現れる。禅は、常に新しい自己が生まれ続けていると説く。
誰もが、心の働きに非常に執着した状態で、修業をする。それ自体、悪いことではないが、（やはり）心の働きに執着しているのだ。夫と妻が手を握ると、二人は何物にも執着する必要はなくなる。同じように、夫婦がさよならを言うとき、離れるという心の働きにふたりとも同意し、同じ働きをしている。両方の場合とも、執着はない。しかし、分かれることに同意がないなら、悲しいことになる。そういうケースはあるが、しかし夢のようである。二人は必然的に別れ、新しい自己が現れる。それゆえ、カップルが突然別れに直面するとき、悲しむのは普通のことだ。誰でもそういう局面では悲しくなる。しかし、「分かれているが、分離されていない」ということがわかると、もはや悲しみはな

くなる。「分かれているが、分離されていない」ということがわかった心の働きが現れると、別れの局面で悲しみを経験することがない。難しいことだ。夢のようだ。他に質問があるかね？

質問 :「私である」自我がこんなふうに生まれる、ということについて、もっとお話しして頂けますか？

老師 : これは理解するのがとても難しい。ここをつかむのに何年も修業しなくてはならない。ちょっとの修業では無理だ。それは夢のようだ。我々は、「賓主一体」と「賓主分離」の地平を常に繰り返し、それを繰り返し明らめていく。仏教には「現前」という特別の言葉がある。これは「明らめる」ということである。もし新しい自己の現前を十分に修業したら、「賓主一体」と「賓主分離」の繰り返しの教理をよく理解できるだろう。
空もしくは無の現前はプラスとマイナスが統合された地平である。タターガタ（如来）禅では、ここを注意深く学ばなくてはならない。根源が二つに分割され、それは突然、新しい根源となるのである。そのプロセスにおいて、どんな種類の働きが現れるのか？必然的に、「賓主分離」と「賓主一体」の繰り返しであるとわかる。そのような繰り返しのプロセスを行くことで、新しい根源の地平が突然、現前する。より深くその詳細をいうと、その根源の地平は無の地平であり、そこではプラスとマイナスが統合されているとわかるのである。不完全な自我、「私である」自我はこの地平には存在しない。そのような地平では次々とおこっては去る過去、現在、未来は消滅する。そこでは、完全な時間と無限が現前すると人は言うだろう。そのような根源の地平は完全な時間の現前であると仏教は説く。それはとても意味深長なことだ。
今、この根源が新しい根源、二つ目の根源を現前するとき、それは「賓主分離」と「賓主一体」が現前するプロセスを必ず通る。そしてその後に、新しい二つ目の根源があらわれる、そのように教えが説かれる。（この部分、ミスなく注意深く翻訳してください！）二つ目の根源が現前するプロセスにおいて、その根源の地平は必ず、過去、現在、未来の世界を現前する。そして、それは過去、現在、未来の世界が消滅した世界である、「賓主一体」の世界を現前する。交互に「賓主分離」と「賓主一体」を現前し、そして「賓主一体」の地平での現前において究極となる、それがプラスとマイナスの働きの性質である。
公案に、「花をみるとき、神はどこにいるか？」とある。この公案は修行の初心者に与えられるものだが、これは初心者には難しい。花をみるとき、花にうっとりと見入って、その後に、統合が現前する。確かに、どの老師もそのように教えるだろう。
そのような、「賓主」（客体と主体）が統合されるプロセスにおいて、プラスとマイナスが完全に統合されるとき、従前の「賓主分離」の世界

は完全に消え去り、二つ目の根源が現れる。従前の世界は夢のようなものだ。私たちは「根源の地平」とよく言うけれども、「根源の地平」は固定されたものではない。もし擬人化された形で神の存在を考えるなら、神は決して固定化された地平でもなく、固定化された存在でもないと言える。神は必ず、新しい二つ目の根源を明らめる。これが仏教の教えである。だから、二つ目の根源を明らめる、根源のプロセスについて手短に説明した。しかし、現実には、このプロセスでは多くのことが起こるのである。

質問：根源の地平の外側に、統合の地平に反映され、主体と客体の分離が夢みたいなものだと知っている、そんな智慧があらわれる、というのは正しいでしょうか？

老師：根源の地平とは、全てを明らめる根源である。それは万物を含む働きをもって現れる。それゆえ、根源の地平は真の愛を明らめることとなるのである。そして後に、この根源の地平はふたつの側面があると仏教は説く。難しいかね？　どうしてかね？　プラスが活動的になると、極大の地平が必ず現れる。これは難しいから、ちょっとふれるだけにしておくよ。極大を明らめることは、「これ以上大きくなる必要のない」というプラスの結末を明らめることである。
その反対の側面は極大を明らめることをその根源としていて、極小の地平に立ち戻る働きをもっている。縮小を明らめることによって、それは必ずこれ以上縮小する必要のない地平を明らめることになる。プラスが活動的になると、必ず「もうこれ以上拡大することはできない、これ以上大きくなる必要はない」と了解する、極大の地平が明らかになる。極大を根源として明らめると、マイナスの働きがその反対の機能をはたす。それは「これ以上小さくなる必要はない」という極小の地平として宇宙を明らめることになる。

28 ページ　文章
公案に、「花をみるとき、神はどこにいるか？」とある。この公案は修行の初心者に与えられるものだが、これは初心者には難しい。花をみるとき、花にうっとりと見入って、その後に、統合が現前する。確かに、どの老師もそのように教えるだろう。

質問：ちょっと明確にしたいのですが、老師が極大について話すとき、それは万物と同一であり、空間と同一であり、時間と同一であり、あらゆる現前しうるものと同一であると、自分がわかっているということを意味するのでしょうか？　極大はもはや拡大せず、立ち現れた万物、

立ち現れている万物、これから立ち現れる万物と同一である、これが意味するところでしょうか？

老師：もちろんそうだ。極大だから、これは万物を生み出すものとして現れる地平である。プラスの働きが極大を明らめるに至ると、それはプラスの働きがプラスの働きをする必要のない地平、拡大の働きをする必要のない地平である。これが極大を明らめることである。ここで何らかの意見が出るなら、老師は「愚か者！」と言って警策で叩くだろうな。臨済禅師なら、叩いて言うだろう。「心の働きにまだとらわれている！　おい、この愚か者！」そしてやっと初めて、修行者は目を覚ますのだ。
空の働き、無の働きを明らめるとき、不完全な自我である「私である」は完全に消失する。ここに至って、妻は思うのである、「夫は私自身であった、彼は夫ではない、私自身であった」と。このように仏教は説く。それゆえ、「私の夫」「私の妻」というとき、考えはまだ成熟しているとはいえない。「私の夫は私自身である」という心の働きは必ず現れ、仏教ではこれは完全智の現前と呼ばれる。必ず、不完全な自己、「私である」という思いは消滅し、妻との統合の中において、プラスの拡大の働きがこれ以上できないという地平を明らめることになるのである。
ちょうど言ったとおり、「私の夫は私自身である」という心の働きは、必ず起こり、それは完全智、摩訶般若波羅蜜多、般若の智慧と仏教では教えられる。このことについては後にふれるが、その教えによると、完全な智慧を明らめると、プラスは完全にマイナスとともに極大を明らめる。プラスとマイナスは常に互いに相反するが、妻は必ず極大を明らめる夫の働きを手伝い、妻からの助力を得て、夫は極大を明らめる。この教理がよくわからないなら、人々は人生がそもそも何なのかわからずに道に迷ってしまうだろう。妻は夫を助け、夫は妻とともに極大を明らめる、そのように仏教は説く。

質問：このまま続けますか、それとも新しい質問をしたほうがいいですか？

老師：新しい質問がいいだろう。その方が、君の心の働きがどのようなものか、分かるからね。
修業と認識のどちらにおいてであれ、私の教えを理解しない人が一人現れたら、臨済寺は混乱に陥るだろう。修業によってではなくても、言語によってでもいいから、私の教えを理解する人が一人あらわれたら、それでよい。しかし誰も理解しないなら、修業でも言葉でも、臨済寺は混乱に陥るだろう。

君は老師の禅について書き物にすると言ったから、私自身が教えを書いたかの如く、話しておこうと思う。

質問：究極の拡大を経験したら、死がもはや必要がなくなるまで死を行じる、新しい種類の自己が現れると老師はおっしゃいました。この考え方について説明して頂けますか？　老師が、自己が現れると言うとき、（万物の）究極の本質への洞察が現れるため、もはや何も経験することはないと了解する新しい自己の地平が現れるということなのでしょうか？

老師：いつも、いつも新しい自己はあらわれている。もし新しい自己があらわれないなら、心の新しい地平があらわれないなら、あなたは何をしているのか、どうやってわかるというのか？
今話しておこう。これまで我々が語ったことを振り返りたいと思う。
仮に、二つの相反する働きを認め、そこから生の本質をみてみよう。それが仏教であり、仏教徒のアプローチだ。相反する働き、プラスとマイナスは固定されているか？　いいや、そんなことはない。このプラスとマイナスの働きは統合と分離を繰り返す。
根源の地平は二つの明らめることを伴っている。極大、比較を絶する地平と、極小である。この両者は真実である。極大は一つの真実であり、極小は一つの真実であり、これらは入れ替わり、繰り返す。存在の本質をいうとき、最初のステップは万物を包含する、この根源の地平に至ることである。
根源の中で活動的になる二つの働きがある。プラスの働きとマイナスの働きである。完全な地平は、プラスとマイナスの働きの統合である。それは「私である」自我が消滅するときに現れる地平である。プラスとマイナスの働きの根源が、プラスとマイナスの働きの統合であると、教えは説かれる。こんなふうに言うこともできる。プラスの神とマイナスの神が統合され、これこそが真の神である、と。
根源の地平では、プラスとマイナスが互いに相反し、そして繰り返し統合すると仮に教えられる。これは非常に活動的に起こっている。時間と子供、全ての幼い存在を生み出す妊娠がおこる。ここは難しいが重要なところだ。子供は無条件に生まれるわけではない。根源が妊娠する働きを明らめ、子供を、即ち存在を生み出す時間の働きに合致するのである。存在を生み出すとは、プラスとマイナスの働きが互いに相反し、そして互いに分離することである。
根源が統合されても、分離すると三つの世界が明らかになる。過去と、現在と、未来だ。人々は心の働きを無条件的に肯定し、「私である」自我があたかも固定されているかのように振る舞うから、どれだけこうした働きについて説明しても、何百万回話しても、君たちは理解でき

ない。心の働きは、自我が生まれると同時におこる。しかし、自己を現前するのは根源なのである。根源の地平は妊娠した地平を現前し、その後に、初めて、「私である」自我が現れるのである。

質問：ちょっと振り返りをさせてください。老師は「私である」自我が無条件的には生起しないとおっしゃいます。それは実際には、主体と客体の究極的な統合を基礎として生起するものではあるものの、しかしそれが、自己は（客体と無関係の）主体でしかないとの認識に基礎をおく考え方でしょうか？　自己が万物との統合から飛び出て生起するので、（訳注：自己が根源と一体であることに）無知のまま（自我が）生起するということでしょうか？　よって（老師がおっしゃることは）今ここで述べた考え方とは異なる基礎によるものなのですね？　これで、老師のおっしゃっていることとして正しいでしょうか？

老師：統合された主体と客体が分離すると、この「私である」という自我が現れる。しかし、これは心の働きにすぎない。人類には「私である」という自我を認めるという悪癖がある。しかしこれは心の働きにすぎない。だから、とても注意しなくてはならない。ポン！　この音をきいたとき、どんな心の働きがあるか？　そんな公案がある。妻が夫を「ねえ！」と呼ぶとき、どんな心の働きが起こるのか？　以前に話した通り、花を見る時、どんな心の働きがあるか？

31 ページ　文章
人々が無条件的に心の働きを肯定し、あたかも自我が固定されたかの如く、その自我の中に立つから、どんなにこの働きを説明しても、たとえ百万回説明しても、理解できない。心の働きは、自我と同時に発生する。

この公案をなんどもなんども工夫すれば、心の働きがなぜ、どうして起こるのか、わかるだろう。

夫と妻の関係も、心の働きである。夫と妻が突然引き離されたら、二人の心の働きの工夫参究がなくなってしまうから、とても悲しむことになる。二人が分離しても統合しても、その両方の場合に心の働きが起きる。どちらの場合でも、二人は一つの世界にいる。分離されているという教えを理解するならば、たとえ妻から引き離されていたとしても、一つの世界に住むのである。これはとても難しいことだ。たとえ引き

離されていても、（実際には）引き離されていないのだ。このような智慧に達するのは難しい。引き離されていても、引き離されてはいないと理解する人、そんな人が真に修業が高度なところに至っているといえる。
般若心経に、「不増不減」とある。我々は分離されていても、なお一つの世界において共にあるのである。これは即ち自我が増大せず、発達しないということである。そうすると必然的に、死の働きも生の働きもないとわかる。「極大」を明らめることにおいて、生の働きをする必要はないし、「極小」を明らめることにおいて、死の働きをする必要もない、このように仏教は説く。死とは本当に重大なことだ。しかし、死の働きと生の働きとは、一つの世界において消滅する。難しいように思えるが、注意深く考えると、我々は皆、一つの世界に住んでいるのだから、難しくはないのだ。いいかね？
（インタビューは 34 ページに続く。）

33 ページ

百年目の年の歩み

2006 年

4 月 1 日～7 日	臨済寺大摂心
4 月 28 日	ジェメズ・ボーディ・マンダラで結制開始
4 月 30 日～5 月 6 日	大摂心
5 月 21 日～27 日	大摂心
5 月 28 日	ジェメス・ボーディ・マンダラの結制終了
6 月 5 日～16 日	ボーディで経典のセミナー
6 月 22 日～28 日	臨済寺大摂心
7 月 3 日	マウント・ボールディで夏の制中開始
7 月 12 日～18 日	大摂心

7 月 23 日〜29 日　臨済寺大摂心
8 月 6 日〜11 日　大摂心
9 月 3 日〜9 日　大摂心
9 月 13 日　マウント・ボールディでの夏の制中終了
10 月 13 日〜15 日　ハクウン寺週末摂心
10 月 17 日　ジェメズ・ボーディ・マンダラで結制開始
10 月 22 日〜29 日　大摂心
11 月 5 日〜11 日　大摂心
11 月 23 日〜29 日　臘八大摂心
11 月 30 日　ジェメズ・ボーディ・マンダラでの結制終了
12 月 9 日　マウント・ボールディでの冬の結制開始
12 月 15 日〜22 日　臘八大摂心
1 月 11 日〜17 日　大摂心
1 月 24 日〜30 日　臨済寺大摂心
2 月 8 日〜14 日　大摂心
2 月 25 日〜3 月 3 日　大摂心
3 月 5 日　制中終了
3 月 9 日〜11 日　ハクウン寺週末摂心
3 月 17 日〜24 日　プエルトリコ大摂心
4 月 1 日〜7 日　臨済寺大摂心
4 月 8 日　老師の 100 歳の誕生日のお祝い

老師の禅の教え

二日目

質問：昨日、死の働きについての話が終わったとき、「極大」の地平を理解した後、「極小」を明らめるまで死の働きの修業をしなくてはならないと考える自我が生起するということでした。この話をもっと深めていただけますか？

老師：仏教は二つの相反する働きを認める。修業という観点から、なぜ我々は生まれるのだろうということを工夫参究したり考えたりするとき、二つの相反する働きを認めないなら、正しい答えには至れないし、「極大」を明らめることもできない。

このプラスとマイナスの二つの働きが同時に始まる、つまり他方なくして一方も生起しないし、この二つは常に同時である、これが教えである。しかし、これら二つは同時ではあるけれども、その機能は異なる。プラスが動き始めると、マイナスが伴う。しかし、この教えは心の働きを無条件的だと考える人々に向けたものだ。これゆえに、仏教ではプラスが少し動くとマイナスが伴うと説く。

質問：老師はお話しになりたいですか、それとも質問してもよろしいでしょうか？

老師：質問していいよ。

質問：私は老師がおっしゃることを理解しようとしております。例えば、プラスの働きが動くとマイナスが伴うと老師がおっしゃるとき、これはつまり、単純にいいますと、ポン！という音を聞くとき、同時に聞く側がポン！になるということでしょうか？　花をみるとき、それは私の自己がその花になるからなのでしょうか？　これが、老師が「プラスとマイナスが共に動く」とおっしゃるところなのでしょうか？それとも、老師は全く違うことをおっしゃっているのでしょうか？

老師：とても違うね。母親と子供がいるとしよう。子供が息をすると、母親はすぐに子供が健康だとわかる。もし夫が「ハ」というと、妻はその「ハ」をすぐにとらえる。プラスが「ハ」というとき、マイナスはすぐにそれをとらえる。だから（そこに）分離はまったくない。たとえその間に物理的な空間があったとしてもだ。だから、「後ほど」とか「ちょっと後で」というのは、隔たりを意味し、それは心の傲慢な働きといえる。二つのものがあるとき、その間に空気があり、その隔たりは空気そのものである。空気は二つの働きを混ぜあわせる。もし空気がなく、分離がないなら、何の問題もない。しかし分離があると、問題が生じる。般若心経には「無色」、即ち「形あるものはない」とある。実体（訳注：原テキストは”material”、「色」の英訳としては”existence”の方が良いと思う。）はない、これが「無色」である。子供と母親が（その間の）空気を規定（訳注：”limit”）していると、教えは説く。

夫と妻が離れている時、困ったことがある。二人の間に宇宙がよこたわる。夫と妻が空間を規定すると二人の間にある様々なものも同様に規定される。宇宙全体、空間を規定することで隔たりが現れる。これはとても難しいことだ。心が無条件的な働きをしている人には、とてもたくさんの疑問がわきあがる。「私である」という自我を無条件的に認める人々にとっては母親と子供の関係はとても難しい。しかし、根本的には、真の地平には「私である」という自我はないのである。

プラスとマイナスが真の関係性を結ぶとき、心の働きはない。しかし、プラスとマイナスが互いに相反しあい、分離の地平にあるとき、隔たりが生まれ、その時に、その両方が「私である」という自我を持つにいたる。生じる自我こそが、その両者の間の隔たりなのである。同じことが、夫と妻の状況についてもいえる。心の働きが現れるところとは、どんな地平であるのかというのは、いい質問だ。分離があるから、隔たりである子供があらわれる、そのように私は答える。そのとき、両親と子供、その 3 人ともに、心の働きがある。心の働きが生まれるところとはどのような地平かと尋ねられたら、こんな風に答えるね。

心の働きが現れる状況とはどんなものかと問われたら？　「私である」という自我が最初にあらわれて、そして心の働きが生起するのか？　それとも心の働きが「私である」自我が生まれる前に現れるのか？　そういう質問は答えにくい。心の働きは、プラスとマイナスが関係性を持った後に現れる。これが仏教の教えである。

もしプラスとマイナスが関係性をもたないならば、もしプラスとマイナスが分離されないならば、心の働きは生起しないと仏教は説く。夫と妻が深い愛の内にあるとき、何も思考はない。深い愛の内にあるとき、何も疑問はない。しかし、妻が夫から逃れると、夫は考える・・どこにいるんだ、と。そして二人とも規定されてしまう。

35 ページ　文章

プラスとマイナスが互いに相反しあい、分離の地平にあるとき、隔たりが生まれ、その時に、その両方が「私である」という自我を持つにいたる。生じる自我こそが、その両者の間の隔たりなのである。

そしてその二人ともが、愛情をもって無条件的（訳注：この箇所の”unconditionally”は他とは異なる含意か。）に他方を把握し、両者が消失する。無の地平が現れる。これが教えである。愛を明らめることは、最もちっぽけなことより更にちっぽけなことだ。統合の地平では、前もないし、後ろもないし、内もなく外もない。

夫と妻が引き離されていると、二人とも（自らの）源泉（たる世界）を規定してしまう。夫と妻の間の隔たりとしての、不完全な世界が現れる。そして二人は再会し、無の地平を明らめる。二人が会うことがないと、般若波羅蜜多、即ち完全なる智慧が現れることはない。

人間の考え方は、般若波羅蜜多、智慧の完成ではない。これは難しいところだ。これが分かれば、禅の修行も熟してきたといえる。心の働きでうろちょろしていると、迷ってしまう。

質問：大憤志をもって、教えの根本的なところへの洞察を得ようと修業にかりたてられること、こういう大憤志はどこから起きるのですか？修行者たちは何によって修業にかりたてられるのでしょうか？

老師：心の働きに執着するなら、妻か夫がやってきて、君をバン！とたたくだろう。そして気づく、「ああ、そうだ！」そうして、君は謝罪

するのさ。

人々が宗教になぜ（訳注：”how”は”because”の誤字とおもわれる。）すがりつくかを考えてみると、この世界に決して平和がないからであることは明らかである。この世界で、宗教の名において戦争をしている指導者をみると、彼らを叩いて言いたい、「目を覚ませ！」と。合衆国がしていることを聞くと、特定の宗教に固定的にとらわれることは悲しむべきことだと思う。

心の完全な働きは、「私である」自我をもたない。夫と妻が口喧嘩をしているとき、二人は分離している。しかし、後になって、二人は「私である」自我を失くすのである。

質問：禅修業の目的は「無我」を知ることであり、「無我」の教えに沿って生を明らめることであると、老師は仰っておられます。「無我」に沿って明らめた生の性質とは、どのようなものでしょうか？

老師：物事の性質とは決してそんなものじゃない。自然は決して間違いをおかさない。自然は必ず、「私である」自我を否定する。もし我々が「私である」自我を否定しないなら、結婚生活の真の味を味わうことはない。妻はどのように夫を認識するだろうか？　夫はどのように妻を認識するだろうか？

この点について、たくさんの公案がある。多くの修行者がこれらの公案に答えようと取り組んでいる。しかし、私は彼らの見解を是としない。なぜなら、そのただ一つの答えは、「これが私だ！　これが私自身だ！」であるからだ。夫と妻が、他方が自身であると理解できないなら、その婚姻は長くは続かないだろう。妻が「夫は私自身である」と考えるとき、静謐で平和となる。夫が「妻は私自身である」と考えるとき、夫は完全である。

夫が、妻を見つけられないので外に出て砂漠に分け入るとき、孤独に苦しみ、彼が彼自身であると気づくまで悲しむことになる。周りには誰もいない。どのように彼の自己を理解できるのか？　これは公案である。

この点を解きほぐすと、真の愛であるという、彼の真の性質に初めて気づくのである。

質問：老師の観点からすると、究極的には「私である」という自我がありませんから、一般の人たちが意志に基づいているといっても、結局それは、意志無き法の働きに帰着するということで正しいのでしょうか？　人々が人生で行っている選択とか応答とかは、結局は太陽のもとで生える草、つまり意志無き働きなのでしょうか？　人々がこんなふうに、あんなふうに走り回っているというのは、風に舞う木の葉のようなものでしょうか？

老師：自然の働きは、法の働きである。万物はその内にプラスとマイナスの働きを持っている。太陽でさえ、窓を通して輝いているが、同じことだ。太陽は太陽ではない。太陽は私自身である。これはとても素晴らしいことだ。いかなる宗教が説く何物も、このような智慧の力、即ち太陽は私自身であるという智慧の力をもってはいないのである。

それゆえ、仏教は仏教ではない。もし仏教があるとするなら、宗教戦争がおこるだろう。ブッシュ大統領は好きだった。彼が真の宗教に学び、中東における紛争がなかったら良かったんだけどね。何かしら彼の宗教では一面的な物の見方に固執し合衆国が危殆に陥ったのである。政治家が野心をもって、自己の権力を自己中心的な政策のために濫用するときは、危険だ。

37 ページ　文章
この点について、たくさんの公案がある。多くの修行者がこれらの公案に答えようと取り組んでいる。しかし、私は彼らの見解を是としない。なぜなら、そのただ一つの答えは、「これが私だ！　これが私自身だ！」であるからだ。

合衆国大統領が特定の宗教に固着するのはよくない。彼が真の民主主義を修める道を歩んでいれば、もっと良かったと思う。

生を受けた我々誰しもが、生の働きを行わなくてはならない。それは私たちの義務である。そして「極大」を明らめることに至ることが、私

たちの義務である。仏教は、我々がもはや生の働きをする必要がないところまで達するのであると教える。そして結婚した生、完全なる統合、「極大」の現前が深化されると仏教は説く。(それは) 結婚した生に気づく人々、完全性の現前に気づく人々、「極大」の現前の智慧を得た人々である。

教えによると、人の働きとは、「極大」が現前し完全な世界が現れるまで、何百万回も主体と客体の統合と分離が繰り返されることである。プラスとマイナスが分離されるときはいつも、不完全な世界が現れる。この一つの世界において、その両者の隔たりの間に、不完全な世界が現れる。しかし必ず、主体と客体の再統合があり、完全な世界が再度現れ、真の愛の現前が起こる。だから、プラスとマイナスの統合と分離をよく明らめるまで、注意深く勉強することが必要である。仏教はこのことを教えている。

このプロセスの間、多くの世界が、主体と客体の統合と分離の繰り返しとして立ち現れる。これらの世界を比較すると、その中身には多くの区別がある。しかし、それらの現前の***教理***は、常に同じである。主体と客体の分離と統合である。岩、蚊、鳥、人類は、分離が統合されるに及ぶと同一である。この教理を理解しないならば、心の真の働きを理解することはないだろう。

しかし、主体と客体の分離を吟味すると、鳥と蛇の世界はそれらの分離された地平において全て異なっている。しかし、統合の世界では、全ての獣と人類、その全てが完全なる地平を明らめるのである。それゆえ、平等と差別の性質を知る智慧が、仏教の説くところである。この教理をはっきりつかまなくてはならない。これを仕損なうと、人類の性質についての明白で正しい洞察を得ることは決してない。

究極的には、主体と客体の統合が何度も何度も繰り返し、最終的な知が生起する。ここまでにおいてとても活動的になっている夫が、ハンカチをとりだして眉を拭き、妻の腕のなかへ眠りにいく。夫は、もうなにも働きが必要ではない地平にいる。しかし妻の働きがあり、これは反対の働きであり、妻が源泉に戻りたいと思うに従って、二人が「極小」に戻っていくのである。

38 ページ　文章

この一つの世界において、その両者の隔たりの間に、不完全な世界が現れる。しかし必ず、主体と客体の再統合があり、完全な世界が再度現

れ、真の愛の現前が起こる。だから、プラスとマイナスの統合と分離をよく明らめるまで、注意深く勉強することが必要である。仏教はこのとこを教えている。

妻が主導権を握り、妻の源泉へと夫を導く。「極大」の地平の後に、夫が目覚め、また眠りまた目覚め、最終的に妻の助力により、初めて悟りに目覚め、物事の本質を明白に見極めるに至る。

「極大」を経験すると、夫は死の働きを行わなくてはならないと気づいて目覚める。妻は今や主導権を握り、夫が付き従う。「極大」の世界が現れると、妻の根源へ回帰する道程において収縮が始まる。そして夫は妻に付き従い、妻が自身の根源に立ち帰る手助けを行う。夫は妻を助けないといけない。そして二人は「極小」の世界へ至る。そこではもう誰も死ぬ必要がなくなるのである。

質問：「極大」の世界の生起もしくは現前からくる智慧は宇宙全体がひとつとして輝いているということであり、宇宙全体がそれ自体であるということです。自己が目覚めた時、「極小」の世界から来る智慧とはどのようなものでしょうか？

老師：同じことだよ。「極大」と「極小」は両方とも同じことの現前である。自己は「極大」と「極小」の現前を経験する。この結論を明瞭に把握しなくてはならない。自己はこのことを明らめるために生まれてくる。この自己はこう考える、「私は『極大』を明らめた、だからこれで終わりだ。」と。しかし、自己をそんな地平に固定することはできないのである。

「極大」の地平は妻の助け、もしくは妻との統合を必要とするということに、自己は気付く。「極大」の後、妻は「極小」へ立ち帰る働きを既に行っている。だから、夫は妻に付き従い、二人は共に死んで「極小」を明らめる。これが得られる智慧である。これが心の働きである。プラスは目覚めて考える、「私は死の働きを含まなくてはならない」と。生けとし生けるものはすべて、死の働きを含まなくてはならない、「極小」に至らなくてはならない、そんな考えは持たない。こうした考えはまだおこっていない。生けるものは常に自我を肯定する。妻と共に、死の働きをとらえ、そこに入っていくという考えは起こらないのである。

しかし、(「極大」を明らめた後は) 世界とこの世界の全てのものとともに死ぬということは真の働きであると気づき、だから夫と妻は「極小」に至るのである。これは、もう一度いうが、真の愛の現前なのである。そして同じように、「極大」の現前も真の愛の働きである。このふたつを明らめること、即ち「極大」と「極小」のは愛の現前である。それはプラスとマイナス、夫と妻の完全な統合の現前である。それは死の働きを超越した地平である。

しかし、この地平は固定されない。必ず、マイナスの働きが死ぬ必要がないことを明らめ、プラスが死ぬ必要がない原初的な働きを明らめるのである。すばらしい関係だ。しかし、この「極小」の世界は固定されない。夫が目覚めそして彼自身のプラスの働きを取り戻す。そしてこれが生の働きの根源である。そして、「極大」の世界を明らめるところに入っていくまで、再びプラスとマイナスがひとつになり分離するのである。

そして、この「極大」の世界から再び、死の働きを明らめなくてはならないと気づく自己を、プラスが生起する。妻は、必ず元の場所に戻らなくてはならないと気づく。そして、マイナスの働きに従って、夫とともに妻が「極小」を明らめる手助けをするために、プラスは自己を犠牲にする。それは夫が妻のために自己を犠牲にする時節である。これを理解すれば、私たちの存在の地平を理解できる。そしてこれが仏教の説くところである。

「万物は私自身として輝いている。『極大』は私が主体と客体の統合を通して妻と共に辿り着いた地平である。主体と客体の両方が私自身である。妻は宇宙として立ち現れている。」プラスはこのような智慧を悟るのである。

科学の世界は常に客体的世界を肯定していくが、しかし仏教では、自身でないものは何もない。それゆえ、夫は妻にキスし、母たる妻の子にキスをするのである。それゆえ、恋人同士が空港でキスをし、長い間抱擁するのである。なぜなら、これが私自身だからだ。自己をみつけることが、仏教の目的である。だから、結婚して子供をもうけ、そして家族から引き離されるとそのことがどれだけ悲しいことか。どれだけ嘆いても足りない。これを癒すにはとても大きな、新しい智慧が必要だ。新しい自己は突然生まれる。そして新しい自己がそうした難しいところを切り抜けさせてくれて、前に向かって進むことができるようになる。たとえあなたと引き離されていても、私はこのひとつの世界におい

てあなたと共にある、そのような考えが生まれる。死ぬまで、我々は引き離され、一緒にいなくても、このひとつの世界に住んでいるのである。そして、人は前に進む力を得る。

世界の人々は妥協し、そして平和の夢を見る。しかし妥協すると、真の平和に至ることは決してない。

万物は根源の世界から生まれる。根源の世界のもともとの表面、それはどのように開かれるのであろうか？　根源の世界には心の働きはない。しかし、根源は心の働きを明らめ、そしてこの働きを通じて、根源は生と死の働きを明らめるのである。根源の世界はまた、なぜ心の働きがおこるかを教えてくれる。

心の働きは否定されるものではない。仏教は我々を教化するために、心の働きを仮に認める。心の働きは「私である」自我を明らめ、そのような心の働きは不完全である。

40 ページ　文章
科学の世界は常に客体的世界を肯定していくが、しかし仏教では、自身でないものは何もない。

心の完全な働きは、自我を肯定する必要はない。この真実を認め、そしてこの旨を教化するために、人は長い道のりを歩まなくてはならない。私たちは今日まで、長い道のりを歩み、この点に至るための多くのプロセスを通ってきた。こうしたプロセスは心の働きに基づいており、私たち誰もがこうしたプロセスを経験するだろう。しかし、こうしたプロセスは全て消え去る。

もし心の働きにとらわれ、固執するなら、私たちは真の自己を経験することはできない。この心の働きが死の働きと出会うと、消え去る。心の働きが死ぬと、その時、自己はどこにある？　「これは自我である。これは自我ではない。この花は私ではない。これこれは私ではない。」と言うのは自我である。そして自我の死は難しい。しかし、結論をいうと、万物が自己なのである。

前に言ったとおり、外国に行ったり砂漠に出かけたりすると、その人が自己を発見できないなら、悲しみと孤独にみまわれる。自己をみつけると、人は完全に安心を得る。だから、人はどのように自己を見つけるのか、友達もなく、家族もなしに、どうやって人は落ち着きと安心を得られるのか？　ただ、「全ては私自身である」と知る自己を見つけることによって、（そこに）落ち着きと安心があり、悲しみから逃れることができるのである。

41 ページ　文章

それはとても奇跡的なことだ。松の木は松の木である、それは私ではない、虫は虫である、それは私ではない、神は神である、それは私ではない、そんなふうにそれまで思っていた。しかし、適切に眠り目覚めるとき、すべての存在が一つの統合された世界に住んでいると気づく。人の目がちゃんと開かれると、言語を越えたすばらしい、奇跡のような世界に出会うのである。

42 ページ

「マウント・ボールディに新しく来た人がいて、私と修業したいと言っている、そう思うと、力が湧いてきて、（マウント・ボールディは）とても遠くだけれども、そこに行くのは何でもないことだ。君に新しい恋人ができたら、ザーザー雨が降ろうがビュービュー風が吹こうがそんなことお構いなしだし、どうやってでも、（その恋人の）ところへ行こうとするだろう、そうでないか？　古くからの恋人がスースーと寝息をたてている時、そこにいたいと思わないかね？」

43 ページ

臨済寺の和尚たち

老師がアメリカで教化した 45 年間の間に、何千もの修行者がやってきて彼の元で修業した。ある者はやってきては去り、ある者はとどまって法の教えと修業に自らを駆り立てた。彼らはマウント・ボールディ、臨済寺、ジェメス・ボーディ・マンダラに居住して理解を深め、老師

の教化に付き従った。数年後、彼らは仏徒としての人生に生涯を捧げる証として、僧侶として得度をうけた。

僧侶の中には、自身が経験し学んだことを他の人と共有し始める人がでてきた。和尚として得度をうけて、彼らはそれぞれの状況下で教化を行い、臨済寺とその周辺施設のマネージメントを補佐する許可を老師からとりつけた。

老師は 25 人以上の和尚を得度した。そして現在は臨済寺に約 40 の禅修業の共同体がある。

和尚のリスト（得度された順）

ギザン・コードー・ロン・オルセン
　僧侶得度　1964 年　　和尚得度　　1972 年　　ジョウシュウ禅寺

コーザン・ジェンタイ・サンディー・スチュアート
　僧侶得度　1967 年　　和尚得度　　1973 年　　ノース・カロライナ禅センター

セイウン・ゲンロー・ヘルベルト・コウデラ
　僧侶得度　1973 年　　和尚得度　　1975 年　　ボーディ・ダルマ禅堂　ウィーン

ショウザン・マーク・ジョスリン
　僧侶得度　1972 年　　和尚得度　　1982 年　　エンツウ寺の小禅堂

コウガン・セイジュ・ボブ・マモーザー

僧侶得度　1978 年　　和尚得度　1984 年　　アルブケルケ禅センター

テキオ・マイケル・ラッドフォード
僧侶得度　1978 年　　和尚得度　1986 年

ホーン・ミョウセン・マーシャ・オルセン
僧侶得度　1976 年　　和尚得度　1988 年　　ジョウシュウ禅寺

ホージュ・エシン・ジョン・ゴッドフリー
僧侶得度　1982 年　　和尚得度　1988 年　　バンクーバー禅センター

ジウン・ホーセン・クリスチャン・レインジャー
僧侶得度　1983 年　　和尚得度　1988 年　　ジェメス・ボーディ・マンダラ禅センター

ジーコ・ミョウクン・ダイアン・セゲーシオ
僧侶得度　1984 年　　和尚得度　1988 年　　ミョウコウ尼僧院

ヨシン・デイヴィッド・ラディン
僧侶得度　1983 年　　和尚得度　1989 年　　イサカ禅センター

ズイウン・ギーコ・デイヴィッド・ラビン
僧侶得度　1983 年　　和尚得度　1999 年　　カクショウ寺

ジョウザン・コーヨー・チャールズ・エンゲナッチ
僧侶得度　1984 年　　和尚得度　1999 年　　ユニバーシティ禅センター、ダイギョウ寺

ゼンゲツ・ミョウキョウ・ジュディス・マクレーン
僧侶得度　1986 年　　和尚得度　1999 年　　デ・ラ・メイン禅センター、エンプク寺

ハクウン・ソーカイ・ジョフ・バラット
僧侶得度　1987 年　　和尚得度　1999 年　　ハクウン寺

ウンガン・キドー・エリック・バーハウ
僧侶得度　1988 年　　和尚得度　1999 年　　ロクオン寺

セイガク・キゲン・ビル・エケソン
僧侶得度　1991 年　　和尚得度　1999 年　　ハリウッド禅センター

ガクドー・コーシン・クリストファー・ケイン
僧侶得度　1991 年　　和尚得度　1999 年　　ピュージェットサウンド禅センター

エコー・シェリル・シュナベル
僧侶得度　1982 年　　和尚得度　2001 年　　マウント・コブ　サイショウ禅寺

トクジュウ・ゲンシュウ・クリストファー・ロウ
僧侶得度　1988 年　　和尚得度　2001 年　　ウィリアムスバーグ禅センター

ギドー・リチャード・シュナベル
　僧侶得度　1996 年　　和尚得度　　2001 年　　マウント・コブ　サイショウ禅寺

キューン・ドクロ・ローランド・ジャッケル
　僧侶得度　1989 年　　和尚得度　　2004 年　　ホウン庵　キャンブリッジ仏教徒協会

チンザン・レス・フェーミ
　僧侶得度　1984 年　　和尚得度　　2006 年　　プリンストン禅ソサイエティ

ゲンシン・エドガー・カン
　僧侶得度　1980 年　　和尚得度　　2006 年　　ロング・アイランド禅センター

ドーン・ブルーノ・シャバーラム
　僧侶得度　1998 年　　和尚得度　　2006 年

セイドー・ラリー・クラーク
　僧侶得度　1996 年　　和尚得度　　2006 年　　ヘキウン山　ホウガク寺

45 ページ写真　注
ホーセン、老師、ミョウクン

46 ページ

いかにして自我は生きるべきか？

自己は全てが一であるという智慧に基づく生を生きねばならない、そんな理想がある。

ほとんどの人類が行っていることは、自己を固定化するということであり、主体と客体の統合としての、完全な、もしくは真の自己をみるのではなく、「私である」自我が主体でしかないと識別することである。

それゆえに、老師は皆、気短に叫んで言うのである。「たわごとを言うな！　話すな！　これ以上何も考えるな！　即今キスしろ！」

花を見るとき自身をみている、蛇を見るとき自身をみている、神を見るとき自身をみている、そのように理解して、参禅で答えられないなら、自己を見つめるという答えをできないならば、老師にまっぷたつにされる。まっぷたつにされた蛇のように、ふたつが醜くのたうちまわるのである。映画を観るより面白いぞ。自分の歳を忘れてしまったよ！

48 ページ　写真　注
老師がアメリカにやってきて 44 周年を記念して

49 ページ

臨済寺とセンター

臨済寺禅センター

臨済寺禅センターは臨済寺組織の中心であり筆頭の寺院である。ほぼ全ての主要な儀式と、全ての和尚の得度式はここで行われる。マウント・ボールディ禅センターは主要な修業センターであるが、老師は毎年大摂心を数回主宰し、在寺のときは毎日参禅させている。

臨済寺

ソーハン、知客
2505　シマロンストリート、ロサンゼルス、カリフォルニア州、〒90018
323-732-2263
office@rinzaiji.org
www.rinzaiji.org

49 ページ　人物　写真　注
ソーハン・ヤングルソン、臨済寺知客

マウント・ボールディ禅センター

マウント・ボールディ禅センターは 1971 年に設立され、それ以来、臨済寺の主要な修行センターとして機能してきた。毎年冬と夏、老師はここで激しい修業期間（制中）を主宰する。雄峰サン・アントニオ、別名マウント・ボールディーは禅センターから遥か 4000 フィート聳え立ち、峰は 6000 フィート以上に位置する。冬は深い雪、夏は砂漠のような暑さは、この土地の荒涼とした美しい景観をなしている。

マウント・ボールディ禅センター

杏山承周老師
ジェント、知客
私書箱 429
7901 マウント・ボールディ道路　マウント・ボールディ、カルフォルニア州、〒91759

909-985-6410　FAX:909-985-4870
www.mbzc.org
office@mbzc.org

50 ページ　写真　右
マウント・ボールディ禅センターのスタッフ

49 ページ　写真　右
マウント・ボールディ禅センター、1970 年代初め

52 ページ

ジェメス・ボーディ・マンダラ禅センター

ジェメス・ボーディ・マンダラ禅センターは老師を迎えて、毎年春と秋に、短い修業期間を設けている。すばらしい温泉と渓谷の急な斜面に囲まれて、ボーディは禅修業に理想的な環境である。老師が「温泉を見つけたのか、来るよ」という約束を果たした 1972 年にボーディは設立された。センターは夏の間、他のグループから来た人たちを迎え入れ、また一年をとおして、周囲の共同体と良好な関係を保っている。ボーディには小さな果樹園と野菜畑と花畑がある。

ジェメス・ボーディ・マンダラ禅センター

ジウン・ホーセン和尚
私書箱 8
ジェメス・スプリングス、ニューメキシコ州　〒87025
505-829-3854

505-709-0053（携帯電話）
office@bmzc.org
hosen1013@yahoo.com
www.bmzc.org

52 ページ　写真　左　注
3 人のボーディの副住職、左から、ゲンロー、セイジュ、そしてジェンタイ

52 ページ　写真　右　注
老師とミッシェル・マーティン、ミッシェルはジェメス・ボーディ・マンダラの設立者。

53 ページ　写真　上　注
ボーディ・マンダラの本堂の祭壇
左から、コウジュン、シュンコウ、老師、ホーセン、テイシン、そしてショーレン

53 ページ　写真　下　注
ボーディ・マンダラの温泉と本堂

アルブケルケ禅センター　コウゲン寺
コウガン・セイジュ和尚
2300 ガーフィールド通り　南東　アルブケルケ、ニューメキシコ州　〒87106
505-268-4877
seiju@azc.org

office@swcp.com

www.azc.org

ブルー・リッジ禅センター

テイドー・ビル・ステファンス

4425 アドヴァンス・ミル道路、アーリースヴィレ、ヴァージニア州　〒22936

434-973-5435

brzen@adelphia.net

www.home.adelphia.net/～brzen

ボーディダルマ禅堂　ウィーン

セイウン・ゲンロー和尚

フライシュマルクト 16-1010、ウィーン、オーストリア

011-43-1-513-3880

bodhidharma@hotmail.com

www.bodhidharmazendo.net

デ・ラ・メイン禅センター　エンプク寺

ゼンゲツ・ミョウコウ和尚

30　ルー・ヴァリーレス、モントリオール、ケベック州　H2W 1C2　カナダ

514-842-3648

czmain@dsuper.net

www.centrezendelamain.ca

プエルトリコ禅センター　チョウオン寺
ゲンタツ、オスカー・ペレイラ
ラ・カンブレ　497 エミリアーノ・ポル通り　アパルタード 186　サンジュアン、プエルトリコ　〒00926
787-720-5578
787-397-2953（携帯電話）
www.centrozen.org
gentatsuopereira@yahoo.com

デンキョウ庵
佐々木春代
2249 西 25 番通り　ロサンゼルス、カリフォルニア州　〒90018
323-737-5521

デザット・ホット・スプリングス
佐々木春代
12280 ミラクル・ヒル道路　デザット・ホット・スプリングス　カリフォルニア州　〒92240
760-329-3912

54 ページ　写真　注
アルブケルケ禅センター

55 ページ　写真　左　注

プエルトリコ禅センター

55ページ　写真　右　注
佐々木春代夫人

ハクウン寺
ハクウン・ソウカイ和尚
1448東シダー通り、テンペ、アリゾナ州　〒85281
480-894-6353
sokai@zenarizona.com
www.zenarizona.com

ヘキウン山　ホウガク寺
セイドウ和尚並びにシュンコウ
グランドジャンクション、コロラド州　〒81504
970-434-3522
seidoclark@gmail.com

ホウコク庵　禅センター
セイドウ・レイ・ロンチ
805ランディー・レイン、コロンビア、ミズーリ州　〒65201
573-875-5428
raymarly@earthlink.net

zen.Columbia.Missouri.org/
hokokuan

ハリウッド禅センター

セイガク・キゲン和尚

8261　ファウンテイン通り、#6　ウエスト・ハリウッド、カリフォルニア州　〒90046

323-552-6026

Kigen01@aol.com

www.hollywoodzen.org

ホウン庵

キューン・ドクロ和尚とシュウコ

75 スパークス通り　キャムブリッジ、マサチュセッツ州、〒02138-2215

617-491-8857

www.unsui.org

info@unsui.org

dokuro@bu.edu

イサカ禅センター

ヨシン和尚及びコウゲツ

56 リーブ道路　スペンサー、ニューヨーク州　〒14883

607-272-0694

info@bodymindretreats.com

ジョウシュウ禅寺
ギサン・コードー和尚並びにフーン・ミョウセン和尚
1401 キャミノ・リアル・サークル　ヘミット、カリフォルニア州　〒92543
951-766-9153
myosenmo@wmconnect.com

56 ページ　写真　左　注
ハクウン寺　禅堂

56 ページ　写真　右　注
イサカ禅センター

カクソウ寺
ズイウン・ギコー和尚
4206 マルケット通り　北東　アルブケルケ　ニューメキシコ州　〒87108
505-328-2145
giko@eathlink.net

エンツウ寺の小禅堂
ショウザン・マーク・ジョスリン和尚
8842 マンダス・オスレン道路　ベインブリッジ島　ワシントン州　〒98110
206-842-2828

entsujizen@zipcon.net

ロング・アイランド禅センター

ゲンシン和尚

6　ブルーステア通り　シュタウケット　ニューヨーク州　〒11733

631-751-8408

edkann@optonline.net

www.zenli.org

マイアミ禅センター

ソウン・ダニー・パオルッチ

2219　南西　59 番街　マイアミ　フロリダ州　〒33155

305-266-0830

ahimandan@aol.com

ミョウコウ尼叢林

ジーコ・ミョウクン和尚

私書箱 1350　コブ　カリフォルニア州　〒95426

707-928-4120

myokun@jps.net

www.myokonisorin.org

マウント・コブ　サイショウ禅寺

ギドー和尚並びにエコー和尚
私書箱 1290　コブ　カリフォルニア州　〒95426
707-928-5667
gido@hughes.net
eko@hughes.net

マウント・ゲイジング禅センター
コウジュン並びにジュンドウ
1597　30 通り　ドロレス　コロラド州　〒81323
970-882-2530
diron@fone.net

ノースカロライナ禅センター
コーザン・ジェンタイ和尚
390　アイアンウッド道路　ピッツボロ　ノースカロライナ州　〒27312-6754
919-542-7411
sandystewart@prodhigy.net
nczencenter@prodigy.net
www.nzccenter.org

57 ページ　写真　左　注
ピュージェット・サウンド禅センター

57 ページ　写真　右　注

ノースカロライナ禅センター

プリンストン禅の集い

チンザン・フェーミ和尚

317　マウント・ルーカス道路　プリンストン　ニュージャージー州　〒08540

609-924-0782

lesfehmi@ix.netcom.com

ピュージェット・サウンド禅センター

ガクドー・コーシン和尚

私書箱 2644　ヴァション　ワシントン州　〒98070

206-463-4332

office@pszen.org

www.pszen.org

ロクオン寺

ウンガン・キドー和尚

私書箱 900079　パルムデール　カリフォルニア州　〒93590

661-265-9232

323-228-0851（携帯電話）

ungankido@yahoo.com

トーコー寺

キョウネン・ジム・ゴードン
1812　ハードスクラッブル道路　ロックスベリー　ニューヨーク州　〒12474
607-326-4501
Morezazen28@yahoo.com
www.maitreyahouse.com

ユニバーシティ禅センター　ダイギョウ寺
ジョウザン・コウヨウ和尚
115　南　42番街　ボウルダー　コロラド州　〒80305
303-440-6553
zen@colorado.edu

アッパー・バレー禅センター
ゲンドー・アリン・フィールド
58　ブリッジ通り　ホワイト・リバー・ジャンクション　バーモント州　〒05001
603-448-4877、603-448-1411
Allyn.field@valley.net
www.UVZC.org

ヴィクトリア禅センター
エシュ・カール・マーティン
4970　ナグル・ラオド　PR#6　スーク　ブリティッシュコロンビア州　カナダ　エリアコード：V0S 1N0
250-642-7936

eshu@zenwest.ca

www.zenwest.ca

ウイリアムスバーグ禅センター

トクジュ・ゲンシュー和尚

119　北　11番街　ブルックリン　ニューヨーク州　〒11211

646-591-9874

genshu@earthlink.net

wzc.rinzaiji.org

バンクーバー禅センター

ホウジュウ・エシン和尚

4269ブラント通り　バンクーバー　ブリティッシュコロンビア州　カナダ　エリアコード：BC V5N 5B5

604-879-0229

www.zen.ca

eshin@zen.ca

テキオ和尚

331ブリーズィズ道路　アラヌイ　クライスト・チャーチ　8007　ニュージーランド

011-64-3-960-5274

アウグスブルグ禅堂

ホーゲン・ヘリベルト・ハルター

ナイトハルトシュトラーベ　13　86159　アウグスブルグ　ドイツ
001-8-21-55-0696
hogen@zen-augsburg.de
www.Zen-augsburg.de
www.Zenbuddhism.info

ボーディ・ダルマ禅堂　デュッセルドルフ
シンゲン・ゲンスレン
ブルックストラーベ 13-15-40235　デュッセルドルフ 40629　ドイツ
0049/(0)211/22 95 016
shingen@shingen.de
www.zen-duesseldorf.de

ドーアン和尚並びにショーレン
1113　西 10 番街　メーサ　アリゾナ州　〒85201
480-668-0866
doan@fastq.com

58 ページ　写真　下　注
ウイリアムスバーグ

59 ページ　写真　注
左から　キョウネン・ジム・ゴードン、レン・ジョン・ピント、ゲンシュウ和尚、ドアン和尚、老師、ショウレン、コーヨー和尚そしてゲン

シン和尚。2007 年 2 月 11 日に亡くなったミョウシン・リタ・カンが中央に座っている。

61 ページ

これまでをふりかえって

ジェンタイ・スチュワート

最初に仏教への興味が起こったのは、16 歳の時だった。私はカリフォルニアのバークレーでアラン・ワッツがラジオで話しているのを聞いた。彼の禅の話に興味をそそられ、禅は宗教なのだろうかという思いが私の心に残った。

29 歳の時、承周老師のところで修業を始めた。私は老師の弟子のピーター・バーグマンがフリー・オズ・ラジオ局で老師にインタビューをするのを聞いた。老師の師匠である承天老師が「ブッダは何歳か？」との問いかけに対し老師が「ブッダの歳は私と同じです」と自然に答えた話を老師がしているのを聞いて、私はすぐに老師に会いたくなった。私はまっすぐにラジオ局にむかい、そこでピーターがガーデナにあるマリポサ臨済禅道場の場所を教えてくれた。

承周老師のところでの修業の日々の間におこった色々なことは、私には忘れることのできない印象的なことである。提唱のとき、もしくは老師が祭壇にむかって深々とお辞儀するとき、老師の修行者に対する計り知れない寛容さと忍耐心に感激して涙することは再三あった。

1973 年に和尚として得度され、ロサンゼルスのシマロン禅センター（現在の臨済寺）の副住職となった。1975 年、私はニューメキシコ州のジェメス・スプリングスのジェメス・ボーディ・マンダラ禅センターの住職に任じられた。過去三年間、チャペル・ヒルの近くにあるノースカロライナ禅センターの住職を務めることができた。

ノースカロライナ禅センターのルーツは、1972 年に遡り、スザンナ・スチュアートがピッツボロの北部の自宅で坐禅会を始めたことに由来する。老師との何回かの大摂心を経て、スザンナは家の近くに小さな禅堂を建てることにした。そして老師が東海岸で摂心をする場所にしようと思ったのである。これがノースカロライナ禅センターのスクイレル・マウンテン禅堂として知られるようになり、1977 年に臨済寺に組み込まれた。その年、スザンナと私は結婚した。

1995 年に、修行者の一人が、私が禅センターの居住施設をつくる構想をもっていたことを知り、ノースカロライナ禅センターの近くに 15

エーカーの土地を寄付してくれた。その後ほどなくして、ブルックス・ブランチ禅堂の建設が始まった。禅堂は 1998 年に完成し、庫裏は 2001 年、多目的寮の建物は 2003 年に建設され、シャワーをする建物は 2005 年に完成した。寮兼食堂ともっと大きい禅堂は、現在計画中で、資金を準備している段階である。

私はより多くの優秀な修行者がここで修業を継続してくれると思っている。そしてこのセンターをとてもすばらしい資産にしていきたいと思う。

ショウザン・ジョスリン

老師のことは 1962 年に耳にした。それは老師が初めてアメリカにやってきた時だった。カリフォルニアではインチキ宗教が羽振りが良かったので、2 年間、老師のところに付き従うことはなかったけれども、友人が、老師がニセ者だったらどうしようという私の気持ちを振り払ってくれたのである。

修業を始めてしばらく、私の住まいのあるクレアモントからガーデナまで車できて、禅堂に設(しつら)えられたガレージで、老師と他の修行者と共に坐禅した。私はクレアモントで坐禅グループをたちあげ、木曜日の夕方にそこに参禅に来てくれるよう、老師を説得した。

ロサンゼルスでは、老師はたくさんの修行者を惹きつけた。そしてその修行者たちのお布施によって、ガーデナよりもっと中心街にあってサンガの発展にもっと適した場所を購入することになった。1968 年に、ロサンゼルスのシマロンにある、以前はカソリックの学校だった不動産を購入する資金が準備できた。そのとき以来、老師には、摂心にふさわしい場所、そしてその他の禅の宗教行事をする場所、そして同じく住む場所ができたのである。

1970 年に、マウント・ボールディ道路の上の方に不動産を探し始めた。数週間、何もいい物件は見つからなかったけど、パサネダのボーイスカウトが夏のサマーキャンプを売りたがっていることを知った。マウント・ボールディの 6500 フィートの高さの土地を森林当局が 99 年間賃貸している物件だった。その後の週末に、車で物件を見に行った。物件をみてがっかりした。その場所は粗雑な感じに見えたが、しかし小屋の中を見るとショックだった。小屋の中は壊されていたのである。割れた窓と腐った食べ物らしい散らかったゴミはともかくとしても、廃棄された衣服、避妊具、排泄物がそこら中にあった。いうまでもなく、多くの修行者の大変な労力をつぎこんで、ここはマウント・ボールディ禅センターになったのである。

1972 年に何人かの他の仲間と一緒に、僧侶としてマウント・ボールディ禅センターで得度をうけた。1974 年に、妻のハジュニと私はセン

ターから車で 15 分のところにマウント・ボールディに小屋を買った。1979 年に小屋は火事で焼失した。再建には 2 年半かかった。

1986 年にワシントン州のベインブリッジに引っ越し・・・2.5 エーカーの土地と一軒の建物が予算にあって買えるところを見つけた。マウント・ボールディの小屋は売却し、この場所を買った。果物の木と、野菜と花を植え、鶏などを飼った。それからちょっと後、私たちの敷地内にエンツウ寺という小さな禅堂を開いた。（コウシンによると、老師はエンツウ寺というのは「神の自由」「人間の自由」という意味だと言っていた。）

セイジュ・マムーザー

私は仏教の瞑想の本を読んでいて偶々禅に興味をもち、私の中に隠れていた（真理への）飢えに気づいたのである。本屋で手に入るあらゆる本で自分なりにやってみたが、満足のいくものではなかった。奨学金の返済が終わって、中古車を買う余裕ができ、「・・・したらどうなるだろう？」ということを知りたがっていた。

1974 年の夏の制中が終わったあと、マウント・ボールディに行くようになった。老師はそこにいなかった。骸骨のように痩せた僧侶のスタッフしかいなかった。

63 ページ　写真　注

セイジュ・マムーザー

しかし私はマウント・ボールディで修業できる機会にひきつけられた。シカゴで私事を処理した後、冬の制中の間、全部で 5 か月をマウント・ボールディで過ごした。制中の最後に、ここで過ごすための奨学金の申し出をうけたが、もう十分だった。確かに老師はすごいが、そこの僧侶は縁遠く人間関係が難しいものだったし、形式的な組織は息苦しいものだった。シカゴに戻り、従前の生活と友人たちに気をむけようとしたけれど、できなかった。私は、深い真理であると思っているものを、とても難解であるという理由で避けて通ろうとしていることに気づいた。老師とマウント・ボールディのところへ戻らなくてはならなかった。

その後の 2 年間、制中のときにマウント・ボールディに戻ったが、制中が終わるとすぐに帰ってしまった。時が過ぎて、形式的な組織が心地よくなり、スタッフとして残ってくれないかとの申し出を了解した。僧侶になることに興味はなかった。ただ、老師のところで修業をした

かったのである。

典座として修業していると、老師は僧侶のためにロサンゼルスで講習を開いた。在家の修行者は出席できない。もし自分の修業を深めたいなら、更なる関わり方が必要であることに気づいた。僧侶になることは気にも留めていなかったが、しかし老師のもとで（訳注：この箇所、”from”よりも”with”か）もっと完全な形の修業をしたかったのである。この点について老師に手紙を書くと、返事はこうだった。「僧侶になれ」そして私は心を決めた。

その後３年間マウント・ボールディに住んだ。ジェンタイが去った後、ボーディダルマを管理する人間を老師は探していた。先輩の僧侶は、要請を受けなかった。私はここを去る気はなかったけれど、もし私が行く必要があるなら行きますと言った。老師は 1980 年の夏に私をボーディに派遣した。

ボーディで 9 年たち、色々な変化があり、何か新しいことをする必要を感じていた。アルブケルケの老師の弟子たちは禅センターを立ち上げたいと言っていて、私はこれを心機一転の機会だと思った。1989 年の 8 月に私はアルブケルケに引っ越し、老師は 1989 年 11 月 11 日にアルブケルケ禅センターの開所式をした。

アルブケルケ禅センターで注目すべきは、常に、家族と仕事への義務を背負いながら、人々が毎日修業していることである。それは「通い禅」で、みんなが許される限り多い時間、もしくは仕方なくこれだけという時間とかかわり方で、修業に参加するように毎日の予定が組まれている。毎日の坐禅の他に、週一回の討論会、法話そして興味はあるが忙しいアルブケルケの修行者のために月一回の 1 日坐禅会があった。最初の数年は、他の人たちと同様、外で仕事をしていた。1994 年だけ、自分の時間の全てをセンターに捧げ、寛容なサンガに頼って生活することができた。

1989 年までに、アルブケルケでの禅の関心が高まるにつれて、センターは大きくなっていった。ニューメキシコ州のユニバーシティの下手のあたりにある一筆の土地を購入して、現在のセンターを建設する資金を募ることができるようになった。1997 年に老師は新しい禅堂の開所式をし、その機会を記念して 4 日間の摂心をしたのである。新しい施設には会議室、図書室そして居住スペースが含まれていた。この静かな場所で、修行者たちは日常生活の騒音や煩わしいことから離れて時をすごし、坐禅、グループディスカッションでの教育、個々人の勉強をしたのである。

私自身に関していうと、老師と今なお研鑽をつんでいることに感謝しており、私のところの修行者たちに私と同じように老師との大摂心に参加するよう背中を押していることも喜んでいます。

64 ページ　文章

印可は、修行者の考えが師家の考えと最終的に一致したときになされる。師家が「君の見性と私の見性は絶対に、お互いに同じである。」というとき、それが初めて印可がなされるときである。そこには師家の法の働きがある。師家があなたの法の働きに仰天するとき、印可がなされるのである。

エシン・ゴッドフレイ

14 歳のとき、子供から大人になるにつれ、変化に気づいた。何か大切なものを後に残してきたと感じた。はっきりと気づいた。30 代の初め、チベットのラマ・イエシェに会い、彼は私が失ったものをもっていると確信した。これが仏教への興味の始まりだった。

そのとき、老師が毎年、大摂心をするためにニュージーランドにやってきた。最初に摂心に参加したあと、坐禅は私にとって自然な修業の仕方だと本能的に感じた。坐禅はとても直接的で、坐禅で自分自身に触れることができるようになった。それは長い間追い求めていたことであった。

ニュージーランドでの年一回の大摂心に参加して 3 年がたち、修業のためにマウント・ボールディ禅センターに行くことにした。提唱の間、老師は呼吸についてとても詳しく、ためになる説明をしてくれた。老師の指導にとても注意をかたむけ、そのとおりにした。時が過ぎ、指導によって私は心を落ち着け、呼吸をする体とともに心を高めていくことができた。後に、私はこの意識の集中と精神の開放が、日常生活にも適用できるものであると気づき、修業をしているとき、より明晰な心の状態になったのである。

承周老師は、1967 年に、仏教への一般の関心にこたえるために初めてバンクーバーを訪れた。老師がこのとき来たことで、坐禅グループができ、後にそれがバンクーバー禅センターになった。

1985 年に、そのバンクーバーのグループを率いるようにと招かれ、そして毎日の坐禅と月一回の一日坐禅を続けている。より長い期間の行事は 1990 年に始めた。4〜6 か月毎に、2〜3 日の行事である。後に、5 日の摂心が始まり、そして 7 日間の摂心となり、需要が高まるにつれ、年 4 回催すようになった。1995 年までに、禅堂の参加者は多くなり、もっと大きい施設に引っ越すことになった。その年の遅くに、現在の施設であるブラント通りの不動産を購入した。1999 年までに、ブラント通りの小さな禅堂が使い勝手が悪くなり、再建計画を立ち上げ、大きさを 2 倍にし、住み込みの僧侶のためのアパートもつくることにした。2001 年までに、計画はほぼ完了し、メンバーは仕事を完成させ

ようとしていた。その計画でサンガの絆はより緊密になり、強くなった。そして今、2007 年に、より大きい設備がまた必要になり、プロジェクトチームは対応策を練っているところである。

禅に真摯に関わった多くの修行者に、心から深く感謝しなくてはならない。みんな 30 年以上にわたり修業を継続してくれた。また現在の管理者たちにも感謝しなくてはならない。熟練した人生経験とビジネス経験を管理監督に役立ててくれた。何があろうとも、老師の教化と努力に貢献することにベストを尽くします。私たちはそうしなくてはならない。このようにして、老師は私たちの教化と努力をしているところに再びあらわれてくれるのです。彼の偉大な努力が無駄になることはないのです。

ミョウクン・セゲーシオ

私はニューメキシコ州の大学の春休みに承周老師と初めて会った。正式な修業をするのはそれが初めての経験だった。その時まで、私は自分で坐禅をし、（修業がどんなものかと）夢を見、機会を待っていた。その春、ボーディ・マンダラ禅センターで 2 週間を過ごし、その後の冬に初めて臘八大摂心をした。のめりこんだ。ほどなく、この修業は精神統一し、完全に心を安らげ、憤志の心が必要であるとわかった。この 3 点を取り組み、そして今でもそうしている。

66 ページ　写真　注

花祭り　臨済寺禅センター

1983 年から 1984 年の冬に、女性として初めて、マウント・ボールディ禅センターの制中の期間、聖侍の役割を任された。そのころ、聖侍か小聖侍だけが化学式トイレを掃除し、老師のトイレの中身を捨てた。(そのトイレは参禅室の近くのクローゼットのなかにあった。)その冬、雪が多く降り、6 か月間の修業期間の終わりには、私の手は化学物質と凍り付くような気候にさらされて腫れ上がり、指がなくなってしまいそうなくらいだった。

その後の 3 月に、僧侶として得度をうけた。

私は女性が修業の指導的地位を占めるための助けをしようと心に決め、今でもそれは私の目標である。現在まで、直日と聖侍の役割をした女性はとても少ない。私は、私の修業のことを女性たちにミョウコウ尼叢林で伝える役割ができてうれしく思っている。ミョウコウ尼叢林は

カリフォルニア州北部にある修業センターである。

最近、私はミョウコウ尼叢林の姉妹センターを作ることに携わっている。新しい市内のセンターで名前はダルマ・ハート禅センターである。このふたつのセンターが手をとりあって機能するのが私の目標である。老師が長寿を保って下さり、私は生きた、呼吸する修業をし続けることが大切だと思っています。これまでの年月の修業（の成果）の上にあぐらをかくのではなく、その成果をはっきりさせていくことが大事とおもっています。私はいつか、私の努力が老師のやさしさに報い始めることを希望しています。

67 ページ　写真　注

ミョウクン・セゲーシオ

ヨシン・ラディン

私はユダヤの信心深い家庭で育てられ、高校の間、教区の付属学校に通った。その学校はとても教練があり、後に禅修業をするのに役に立った。私がまだ若いころ両親が亡くなり、どうして灰に帰すべき運命にある、（人生の）目標や生を切実に追い求めるのであろうかと疑問に感じた。16 歳(訳注：”sixities”は”sixteen”の誤記か)のとき、大学生になり、私は大麻と LSD をやり、仏教に興味がそそられる経験をした。7 年間ヒッピー生活をしてジェットコースター（訳注：のような人生？）にのった後、私は「ブッダは重力の中心にいる」という、ラマ・ファウンデーション（訳注：ヒッピーなどが集まって瞑想する、ニューメキシコ州の共同体）での摂心のときの、老師の提唱のパンフレットを読んだ。私は思った。「ここには麻薬やタバコなしにこういうことを知っている人がいるんだ！」

私はマウント・ボールディに電話して老師のスケジュールを聞いた。そのとき、1976 年の臘八の数日前で、私は行くことにした。ゲンロが知客で、ものすごいオーストリアの訛り声で言った。「本当にやりたいんだな？　本当に大変だぞ！」

1 年後、一人目の子が生まれ、ジョシと名付けた。承周をまねたものだ。更に子供が産まれて、摂心に行っても長い間センターにいられなくなった。

私が 10 年住んだヒッピーの地区は解体されて、新たにビーチ・ヒル・ポンド瞑想センターになり、老師は 1978 年から 1980 年まで摂心をしにきた。電気も水道も電話もない。看経はロウソクの明かりでおこなった。提唱では老師は何度も釈迦牟尼は「ヒッピーの王」だと言った。

私が妻と 1980 年に離婚して、それによりビーチ・ヒル・ポンド（での修業）は終焉をむかえイサカ禅センターに顔をだすようになった。

無常の理を感じさせる出来事だった。1984 年に、15 年にわたり最も親しい友人で会ったコウゲツと再婚し、そして 1986 年、イサカ禅センターの 20 年にわたる拠点であったイサカの外に、60 エーカーの土地を購入した。1991 年にセンターは焼失してしまった。老師と何人かの臨済寺のメンバーは私たちをイサカに送り込み、この困難な局面を支援するようにいった。それから、センターは再建され、行事と禅修業の施設として機能している。

ブッダの智慧をこの世界にはっきりと、力強くもたらしてくれる師家と出会えたことは、私の人生での大きな恵みであります。

69 ページ　写真　注

ジョシと老師

69 ページ　文章

「みんなが言う、『老師、気を楽にしてください、参禅を減らしましょう、休んでください。』とね。人類の視点からは、そうだね、それはいいことを言っている。しかしより重要なことは、無を明らめることであり、そのためには修業が必要だ。」

「私はこの国に来て 40 年以上になる。この文化圏に暮らす人々の主要な問題は、自我がものであり、実体であると確信していることである。」

ソーカイ・バラット

坐禅と何回もの摂心が強く強調されているのをみて、私は 1975 年に初めて老師との修業に参加した。私はそれまで全く、他の法の師家のもとで学んだことはなかった。私の修業は 1980 年、マウント・ボールディ禅センターでの制中で始まった。

老師が、通訳がいないのに法の働きについて教えてくれたことをほのぼのと思い出す。私たち二人は臨済寺の居室で二人きりだった。私はこんな偉大な師家がこんなにも長い間、修行者を教化しているなんて素晴らしいことだと思った。

また別の時、マウント・ボールディの制間の間、老師は夕方に僧侶のグループに参禅をすべきかどうか尋ねた。決をとり、一人を除く全員が、老師はとても疲れているから参禅はないほうがいいと言った。（しかし）その夕方には参禅はあった。老師が（修行者の）近くにいるときは、いつでも参禅の準備ができているのだと理解した。

私の気持ちが固まり、私は老師にネバダ州に禅センターを立ち上げたいと提案した。「いいね。」彼は言った。そしてちょっと間をおいて、「フェニックスがいい。」と言った。フェニックスに着くとすぐに、禅堂の坐禅スケジュールの宣伝を始めた。誰もこなかった。こうしたこ

とが 6 か月続き、家に帰りたくなった。何がしか私は固執していたのだ。そして徐々に人々が参加し始めた。1994 年までに、ハクウン寺禅センターの住職をすることができた。そしてサンガはシンカイと私にとても親切な人ばかりだ。

深い感謝の心をもって、私は老師と可能な限り長く、参禅の修業を続けていきます。

キドー・バーハウ

二つの独特な経験により私は禅仏教に接することになった。一つ目は、1978 年 9 月 25 日午前 9 時 1 分に起こった。そのとき、この国で 3 回目になる最悪の航空機事故を目撃した。私と、恐怖で固まってしまった何百人もの見物客がみているところから 1 ブロックはなれたところに、小型飛行機のパイロットの体が地面に落ちていった。致命的に航行能力を失った 727 型機は、ロールオーバーして墜落してしまうまえ、数秒間、動かずに浮いているようにみえた。音のない、黒いきのこの形の雲をみて、私はその日の朝、決して忘れない近い誓いをたてた。それは、この世界を理解しようということだった。そのとき 14 歳だった。

承周老師との修業は 1987 年の夏に始まった。6 月 28 日にマウント・ボールディ禅センターに到着した。私の目的は、夏の制中を完了し、ちゃんとした禅修業に参加し成果をだしたことについて、大学の卒業論文を書くことであった。その夏の終わりごろ、修業期間の終わりが近づいて、私は正式にマウント・ボールディ禅センターの住人になり、僧侶になれないか尋ねた。

9 年マウント・ボールディに住んで、マウント・コブに 1 年半派遣された。その後、私は臨済寺に戻った。私は臨済寺に留まるつもりはないことを老師ははっきりわかってくれた。臨済寺で 2 年が過ぎ、アンテ・バレーからきた二人の修行者が、臨済寺が残りのことをやってくれるなら、建物と資産の一部分を寄付すると申し出た。「パルムデールでセンターを立ち上げることを考えましょうか？」彼らはこう尋ねた。

新しいセンターを始めるのは大きな挑戦だった。車はなく、設備も整っていないし、その日の夕方にきた友達からの恩恵にあずかったのは唯一、食べ物だった。最初の仏壇はブッダを一番上においた箱だった。坐蒲はなく、枕や蒲団、椅子を使った。庭で食べ物を栽培した。

サンガは上昇気流にのった。私たちは道路や歩道の改良を終えた。寺院の建設にはまだ数年かかる。禅堂は居室のままだが、そこは手作りの仏壇と単と座布団で引き立っている。部屋の全ての物が、修行者から寄付してもらったものか、修行者が作ったものである。

71 ページ　写真　注

キドー・バーハウ

キゲン・エクソン

禅に惹きつけられたが、好奇心と不安がうつうつとないまぜになっている状態だった。私は老師に会う前、2 年間、キャンブリッジ仏教協会のミョウオン・モーリン・スチュアートフリーグッドで禅を勉強した。老師に会うと、1988 年 10 月にジェンタイ庵にやってきた。そのとき、テキオが知客で私の相見香の儀礼とともに最初に老師の元での参禅を行った。

老師とは数えきれないほどの素敵な思い出がある。その中で特に素晴らしい思い出は、キドーとコーシン、ゲンシュウと私が老師との薬石に招かれた夜だった。いつものとおり、隠侍が多すぎる量の料理をだして、老師が私たちのために注意深く用意された料理を全部たいらげるように急き立てたのであった。食事の最中、天井からゆっくりとぶらさがって下りてくる小さなものに気づいた。コーシンと私との間でブラブラ浮いているそれをじっとみても、沈黙のままであった。コーシンが指でそれをつかみにいくと、それは指の上にのった。私はそれを見て、怖くてすくんでしまい、凍ったように座って、ぽかんとみていた。突然、コーシンがそれをふうっと息をして、みている私の顔の方へ吹きかけた。老師は、私がこれまで聞いたこともないほど大きい声で笑った。

老師との修業、そこには「洞察する」洞察と、「洞察のない」洞察がある。色んなときに、心の本質の中に直観が湧いて出てくる。しかし、こうした効果的な洞察ができるよりもはるかに多いのは、物事を正しく見ることができない場合である。

最後に、老師が私に示してくれたこと全てについて、老師にどのように感謝するか考えるに、私は自分の腕や脚や脳や体に「ありがとう」などと言えたことがあろうか、と思う。老師は常に私とともにあるのだ。

コーシン・ケイン

私は、1990 年 2 月に老師の元で修業を始めた。24 歳だった。マウント・ボールディに旅行して私の最初の師匠であるジェンタイのところで大摂心をした。参禅では老師のところへは行かず、その 1 週間で体はひどく痛んだが、帰ってきてもう制中を申し込むつもりでいた！

ボールディでの最初の夏、私はひどい状態になった。体重は落ち、ほとんどしゃべれず、家からの電子メールも開かず、毎夜、時間を超過して坐禅をした。その夏、私に与えられた公案は、「キリストは死んだ、天国へ行った、地獄へ行った、そして 3 日目に復活した。君はどのように復活するのか？」だった。その公案はとても私の心を挫くものだった。まだ死に方も知らないのに、いかにして復活するのかなんてどうやったらわかるんだ？　思い返すと、老師は私を前に呼び出そうとしたのだ。死の行進から呼び出して、死と生を包含する真の禅修業に導

こうとしたのだ。今日、指導者として、時々考える。「復活のことを忘れるな！」

私が自分自身の人生を生きていると、マウント・ボールディの日々のことをよく考える。それよりも、私は老師のスタイルのことを考える。私が感情にまみれているとき、私は老師が今の感情から他の感情へ苦も無く移行させる手法を思い出す。どうすればわからないとき、愛情に満ちた大胆な手段を思い出す。私たちが住んでいる小さな二倍福のトレーラー（訳注：”double-wide trailer”幅 20 フィート以上、長さ 90 フィート以下のトレーラーで、二つのユニットからなるものの由。）に居心地の悪さを感じる時、マウント・ボールディの老師の窮屈な部屋のことを考える。また、かつて、私は参禅のブザー箱を修理しようとして、適する道具を取りに戻りますと言ったことを思い出す。老師は行くなと言った。今ここにある道具で修理できると言った。ダクト用のテープを使って修理したのである。それが老師のスタイルだ。

何より、老師は動くこと、変化すること、試してみることを止めることは拒否したように私には見える。老師が 90 代の初め、私に言った。「もうあと 10 年生きるよ。まだ学んでいる。学ぶことはたくさんある。酒がよくないのはわかっている。しかし酒は好きだ。酒を飲む。私は研究がしたい。まだ学んでいる・・・。」

これまでに書いた以外の、沢山の沢山のことも同じように、私は老師に感謝したい。老師が教え諭し、冷厳な修業をして暖かい心へと導く、その全ての労をとってくれることに感謝したい。

老師が人々を彼の人生のなかに流し込んでくださって本当に感謝します。（訳注：この箇所誤植あるか。）私は老師の労を頂いて感謝しています。そうした老師の労の一部分の何であれ、私の身になったものに感謝します。そして、身にならなかったものであっても、恥ずかしく思って、老師に会うたびにより頑張って修業をしようと思って、感謝いたします。

ゲンシュウ・ロ

私の人生の初期、純粋にものごとをみるというやり方は、考える心よりも深い何事かを経験するやり方であった。禅修業では、単に坐るという考え、純粋にありのままに現実を経験すること、加えて正法を継いだ師家の教導をうけるというのは、興味をそそることである。私の禅修業は、人里離れた辺鄙な場所の、暗い夜の寒々とした禅堂で熱いお茶を出されて初めて味わったものだ。そして、数時間寝た後、一言も話さず聞かず、人里離れた辺鄙な場所の、暗い夜の寒々とした禅堂で、熱いお茶のところに戻ったのである。私には、これはとても意味深長で正しいことであるとの印象を持った。それは 1988 年、ボーディ・マンダラ禅センターでのことだった。

老師が師家であることは、これは比べようもないことだ。それは、人が恋人や子供や親に対してもつ愛ではなく、違った種類の愛である。

彼の教えの教学的側面は、私がいままで聞いたこともないほど明晰で深いものである。教学的側面を完全なものにするのは、彼が教える修業である。ある瞬間にはいかなる働きが間近にあってもその中に全身を投入すること、そしてその次の瞬間には、人類は全世界とその中の万物が自身の投影であると気づいている、そんな考えに立ち戻る。これが、私の人生で修業しようとしていることだ。

74 ページ　写真　注
キゲンとゲンシュウ

2002 年に後に妻となるモーリーン・エレンホーンと一緒にニューヨーク市にやってきた。看経を聞き黒い僧衣をみて、近所の人は、いったい何の悪魔の儀式をそこでやっているのかと聞いてきた。しかし、仏教に興味のある人々に法話をするために招かれるたびに、人々がいつも私のしゃべったことに本当にすぐに反応してくれたので、これはとても勇気づけられる。誰かが禅に本当に興味があるというならいつでも、喜んで修業に来て、あるいはその他の形の支援をしたいと思います。

ギドー・シュナベル

私は 1971 年に老師の元で修業を始めた。最初の大摂心はキャッツキルズのアワスティング湖だった。とてもすごい経験だった。私がそれまでに出くわしたいかなるものよりもすごかった。私は禅の道を始めようと思った。

その後 5 年以上にわたり、私は 4 回、マウント・ボールディで制中に参加した。臨済寺に住んで常時修業をして、外の「正規の」仕事をもつときもあり、もたないときもあった。マウント・ボールディと臨済寺での大摂心には、可能な限り参加した。それはたいてい、年数回だった。1996 年に僧侶に得度された。

過去 8 年間、2001 年に和尚として得度された妻のエコーとともに、私はカリフォルニア州の北部のマウント・コブ・サイショウ禅寺の住職として、僧侶として住した。その同じ年に、私も和尚に得度された。

老師に出会う前は、いかなる場面でも、他の仏教徒や禅の師家に会うことはなかった。老師のおかげで、禅に向かうことができるようになった。このことについて、言葉でもって老師に適切に感謝の意を伝えることは難しい。私の人生それ自体が感謝の表現であり、感謝の表現になることを希望します。

75 ページ　写真　注
ギドー・シュナベル

ドクロ・ジャッケル

私はテレビでゲンロ・セイウンを観て、1980 年代の初めにオーストリアで禅の修行を始めた。すぐに禅を試してみようと思った。数年の修業の後、私はオーストリアで行われる年一回の大摂心の期間中に、老師に出会った。そのとき、私は法の師をみつけたと分かった。その次の年、マウント・ボールディでの夏の制中を申し込んだ。そして何年もそこで定期的に修業をした。そのころは、私はインスブルックの町の禅堂を走り回っており、禅堂は 12 世紀に建設された建物の 5 階に相当する高さのフロアに入居していた。5 階下では旅行客が半ズボン（訳注：チロル地方で男性がはくサスペンダー付ズボン）をきてチロル地方の風習のダンスをし、ヨーデル（訳注：アルプス地方独特の歌唱）を歌っていた。

私は 1989 年に得度をうけた。そしてオーストリアのプロのミュージシャンの領域と、合衆国の禅の僧侶の領域を行ったり来たりしている。1994 年に、私はシューコと一緒に生きるために合衆国に引っ越すことを決めた。シューコのことは、マウント・ボールディでの沢山の修業期間でよく知っていた。私たちは 1995 年に結婚し、ボストンに引っ越してきた。老師のところで修業を続けながら、結婚以来そこで暮らしている。

2004 年に、幸運なことに、キャムブリッジ仏教協会（ＣＢＡ）と接触することができて、そこで禅グループを指導するよう頼まれた。そのときから、老師が「法雲庵」と名付けた小さな寺院でＣＢＡのための禅の活動を組織的に行っている。私たちはボストンの地域で自立的な臨済寺禅センターを創設するために、現在も精力的に活動している。

禅修業と老師の教えは、私の人生のすべてに強くいきわたっている。私は老師とサンガにとても恩義を感じています。そして、タターガタ禅の教えに感謝しています。老師と老師に係る人々に出会えたこと、そして何より、老師とともに研鑽できることは、他の人にはない特別なことであり、非常に幸運なことであります。

ゲンシン・カン

私は鈴木博士の「禅仏教」の書評をニューヨークタイムズ紙で読んだ。そこにはこんな文章がのっていた。「言葉や文字を使わずに、心から心へ法を伝達する。」この文章が私の心に突き刺さり、初めて禅に興味をもった。そのとき、23 歳か 24 歳だった。

現在はチンザン和尚であるレス・フェーミが主宰する大摂心に、1972 年、42 歳のときに初めて老師と会った。老師はマネージャーのオフィスのモダンな台所の裏手で参禅をさせた。そこはガラスの壁があって、台所の方に開けていた。

私は数学者です、と老師に話すと、老師は「1＋1 は？」と聞いてきた。

「2 です。」と答えた。

「違う！　１＋1 は 0 だ。」老師は声をあげて言った。これは、私が残りの人生、参究することになる寂滅の教義をあらわしていたのだ。

もうずっと昔、老師は私たちのロング・アイランド禅センターに揮毫を贈呈してくれた。それは漢字三文字で、「不恐与」である。「全ての完成されていない存在を救うことに、自らを投じることを恐れてはならない。」という意味である。それ以来、このことが最も重要で貴重な修業なのだと、修行者たちに教えている。

セイドー・クラーク

私は 1974 年に老師と禅修業を始めた。その前は、鈴木博士、アラン・ワッツ、フィリップ・カプローの「禅の 3 つの柱」などを読んでいた。こうした本とかに触発されて、ソウン・サンやジャン・チョーゼンといった師匠のところで修業し、何回か摂心に参加した。

後に、コロラド州のスノーマス・トラピスト修道院の神父が、承周老師が修道院僧たちのために摂心をすると教えてくれた。私も参加できますかと尋ねると、他の修道院僧と相談したうえで、いいよと言ってくれた。

本で禅について考えることに心惹かれていたが、実際の修業に導いてくれたのは老師だった。最初に承周老師に会ったときから前に進み始め、禅の教えを直接経験することになった。マウント・ボールディのボーディ・マンダラと、その他の臨済寺のセンターでの 30 年の修業を終えたところである。

こうしたことを全て経験してもなお、私は老師の教えに啓発される。この春、老師は提唱で言った。「タターガタ禅は『自らこのようにせよ。呼吸により愛の働きを行え。』と指示し、要求する。」これは私にとってとても大事なことで、毎日の生活でこの修業をおこなっている。

老師は 2001 年 10 月、3 日間の摂心の終わりに、コロラド州のグランド・ジャンクションにあるヘキウン山ホウガク寺を正式に開山した。老師が正式にセンターを開く前、何年も私たちはそこで坐禅をしていた。

どのようなことばを尽くしても、老師と老師の教えに対する感謝の念を表現することはできない。恐らく、感謝をする一番簡単な方法は、生きている限り修業を続けることだろう。

78 ページ　写真　注
セイドー・クラークとドアン・シャバルム

79 ページ

逸話

何年か前、みんなで宴会をした。老師は私の腕をつついて、グラスをかかげて言った。「すみませんが、まだ死んでおりません。」

私が２回目に大摂心に参加したとき、老師は参禅で言った。「禅では神を信じない。君こそが神の本質を備えている。」これにはとてもショックをうけ、私の中の深いところに真理を認めた。この経験の後、坐禅で私は新しい目的ができた。私は無数に積み重なった悪癖、条件付け、混乱、誤った考え、その他、老師が言ったことを見通すための妨げとなることをかなぐりすてたいと思った。このプロセスには長い長い年月がかかり、しばしば心の中が乱れて中断することがあった。

修業の期間に、坐禅は私にとっては奮闘に他ならず、あっさりと（訳注：”with”は”without”か)、よく眠気がして意識が遠のいたりした。提唱のときにも眠くなって寝てしまった。ある提唱の真最中に、私は老師が「くぐり抜けねばならぬことを、くぐり抜けねばならぬ。」とだけ目を覚まして聞いたあと、またすうっと眠りにおちてしまった。（しかし）この言葉は禅修業における深い信念に私を導いてくれた。また、この言葉は日常生活で困難なことに立ち向かうときの信念にもなった。私は自我を固定することをやめ、大抵のところ、自身が何がしかの方向性を示す模範となることをやめた。

修業が進んで、私はより老師の教えを理解するようになり、老師の教えが参禅（での見解）とむすびつくのと同じくらい、個人的な経験に老師の教えが関係するようになってきた。仏教が（単なる）哲学の理論ではなく、日常生活を生きる道標であることに、とても感謝しています。

シマロンでの摂心の間、何かの用事で庫裏に行った。そのとき、私は聖侍だった。典座はどこか他所にいて、老師は白い着物をきて、椅子に座り、大きな眼鏡をかけて何かをじっと読んでいた。私は思った。「ああ、これは老師に禅の質問をするいいチャンスだ。」それで私は老師の方へ歩いていき、質問を始めた。しかし、老師は私が質問してくるのを察知し、私が質問を言い終えるまえに答えた。「今はやめて。」老師は言った。「ここには新聞を読んでいる日本の老人しかいないよ。」

ある日、マウント・ボールディの禅堂で坐禅をしているとき、息を吐くときに手を広げ、息を吸うときには手を閉じる、そんな強い、自律的な衝動にかられた。そうしていると、私の意識がそれと同時に広がり、収縮するように感じた。次の坐禅で、私が一言も話さないのに、老師は私をみて、私が禅堂でやっていたように老師が手を広げて閉じると、言った。「君は禅の話ができるな。」そして鈴を鳴らした。

もうひとつ、思い出に残っているのが、車を運転しているとき、老師は隣に座って、口をあけていびきをかいて寝ていた。運転しながら坐禅をしようとしてまっすぐに座ると、ついにとても目覚めた、力強いある一点への鋭い感覚をもつにいたった。まさにその時、老師が突然腰をうかして言った、「君と私は、同じ心だ！」そして老師はまた眠ってしまった。

臨済寺での参禅の際に１年かそこらで　承周老師の教えの根源を洞察するようになった。承周老師はある公案に対する見解をだすよう私につきつけていた。「これを経験しないと、禅宗の伝統は理解できない。」老師は言った。「見解を出さなくてはならない。さもなければ、前には進めない。とても明白なことだ。」見解は少しの間、（進展がなく）固まってしまった。

その朝の参禅で、私は老師に公案の見解を述べた。老師は微笑んで活気づき、望ましい体験を（したということを）思わせる顔つきをした。私の心に湧き起ったのは、見解と見解の現前と、そこに含まれる深遠なものであった。ものも言えないほど驚き、茶色のお辞儀をするための

マットをみつめ、私は自分が明らめたことを述べた。老師は大声で笑うと、大きな調子で鈴をならした。その朝、退出するとき老師にお辞儀を仕損なって、知客の前をふらふら歩き、知客にもお辞儀をするのを忘れた。後に、前堂に戻って、禅修業をするまえに勉強したことはすべて価値がないものであったと分かった。

夏が秋にかわり、老師は私に物乞い行である托鉢（訳注：”takahatsu”ではなく”takuhatsu”、以下同じ）を始めさせた。外に出ていく僧侶と一度だけ参加して、ロサンゼルスのダウンタウンの近くで、食べ物を恵んでくれる商店の迷路の中で托鉢するよう、置いていかれた。最初の何時間かは胸が苦しかったけれど、私は今でもこれが今までやった修業のなかでもっともいいものだと考えている。老師が托鉢の修業を取り入れて、修行者に托鉢修業をさせ、更に三年半の間、托鉢修業をさせてくれた。托鉢修業をする者がだれであれ、その人には、正しいものの見方を明らめているとき、もしくはそれができていないとき、そのことが痛いほどよくわかる。これほどいい監督や教師はいない。私の日常生活の修業の助けとなるものは禅の心の形成期の修業であり、最初は挑戦する心が必要となるのである。

マウント・ボールディで知客であったある日、慣例により、私にとってはその時重要であったと思う、事務に関する質問をするために参禅の 10 分前に老師の小屋に行った。老師はグレープフルーツを食べていた。老師はグレープフルーツを一つ残らず、ものすごい勢いで食べていて、テーブルの上に皮を重ねて置いてカップの形にしようとしていた。私は声も出ないほど驚いて、老師に尋ねようとしていたことを全部忘れてしまった。

坐禅の期間、公案に答える唯一の正しい方法は、参禅で大股で老師の方に歩き、ノックすることだという考えをもった。修業期間の残りと経行を通じて、その考えを固くたもち、呼吸をしてふつふつと沸き立たせ、それを確実に行えるように意気込んだ。参禅で競争し、2 番目になった。なので、私の決心に集中するために、管長の鈴がなるまで少しの時間があった。しかし、私が参禅に入るよう、鈴が鳴らされそうになったちょうどそのとき、これは間違っているという考えが起こった。恐らく、老師が一日四回、毎日、一生涯、参禅させている事実から考えると、私は何かを見失っているのだろうと思えた。私は怖くなって体がほとんどこわばってしまい、よろよろと部屋になんとか入り、お辞儀してマットに口をつけ、血が固まるような混乱とパニックの叫び声をあげてしまった。老師はすぐに言った。「そこにいても、君を愛しているよ。君がどこに行こうが、君を愛している。」そして鈴をならした。

私が聖侍であったある冬、クリスマスの数日前、ひどいインフルエンザで寝込んだ。クリスマスイブにはまだ熱が高く、クリスマスの朝、日が昇ると、私の部屋のドアを大きくたたく音がした。ドアが開いて、老師が入ってきた。杖を手にし、誰かが老師のために作った紫色のフードのマントをきていて小さな妖精のようにみえた。「大丈夫か？」老師は尋ねた。

81 ページ　写真　注
ゲント、マウント・ボールディの知客

「大丈夫です。」私は言った。老師は私の方に来て額の熱をはかり、少しの間そこに立っていた。そして言った。「老師は心配したよ。」そして老師はくるりと向きをかえて立ち去った。戻っていくときの足取りはおぼつかないが、この 90 歳の老人が風と寒さのなかで何とか折り合いをつけることのできたのがこの歩き方なのだろう。そういう心持で 50 歳、60 歳、70 歳そして 100 歳でも持ち続けたいものだ。私は今感謝の念でいっぱいであり、私の全人生のために在りたい、老師の教えのために在りたい、自我が固定されていない巨大な存在（である老師）のために在りたいと考えている。

老師と初めて出会ったのは、1966 年の 12 月で、とても思い出深いものである。私はカリフォルニア州のガーデナの歯医者のオフィスに到着した。そこは、そのとき、老師の数人の修行者のために禅センターとして場所を提供していた。私は全身の節々が関節炎で苦しんでいて、とくに膝がひどかった。坐蒲の上に坐るだけでも、心がくじけそうだが、しかし私は鈴木博士の書籍、「仏教」に触発されていたので、何をせよと言われても、耐える決意でいた。坐禅の姿勢をとるために足を曲げるとすぐに、痛みに反応して汗が出始めた。

参禅で老師に会うようになって、慣例通りのお辞儀をし、すっと歩いて入って、老師の前にあぐらで座った。老師は私をじっと見て、私も老師を見た。私は丸裸にされた気分になった。老師は何かを言ったが、私は理解できなかった。老師は同じことを繰り返し述べたが、私には老師が言っていることが理解できなかった。老師は更に同じ言葉を繰り返したが、私は肩をすくめ、失意に落ちるしかなかった。老師はまた繰り返したが、それでも何一つわからなかった。

とうとう、老師は文章の最初の言葉から話し始め、私が理解するまで、発音をあれこれ変えながら何度も何度も言った。老師は、残りの言

葉についても全部、私が理解するまでこのプロセスを繰り返した。このやりとりにおいて、老師がイライラしているようなそぶりは全く感じなかった。

老師は人類が体験するあらゆることを知っているように私には思える。そしていかなる体験にも恐れを抱いていない。マウント・ボールディで知客をしていたとき、私がどうすべきか老師のところに行って尋ねると、老師が「何でもいいよ」とか「君の考えでいいよ」ということが何度もあった。また、たまに私が老師の食事を料理しようとすると、（何が食べたいか聞くと）老師のやさしさが私の若い手に届く。「なんでもいいよ。」と。本当のことを言うと、何でもいいというわけではない。しかし、老師は物事がうまくいかなくなっても気にしないのだと感じた。何がどうなっても柔軟に対処でき、災害はいい教化の手段であると考えていた。少なくとも、沢山の災害を経て、私はそのような感覚を持った。

83 ページ

蝶が花畑に迷うが如く、

赤子が母の乳房にしゃぶりつくが如く、

鳥が木で羽を休めるが如く、

この世界で 67 年間、

私は神とともに遊んできた。

承周老師、1974 年

84 ページ　写真　注
老師とジカン・レナード・コーエンと長尾雅人教授（右）、受賞セレモニーで。

85 ページ

承周老師の偉業をたたえて

承周老師が仏教伝道協会から仏教伝道功労章を受賞した 1996 年、日本でのセレモニーでの、高名な長尾雅人教授によるスピーチの抜粋

佐々木承周老師の禅と、禅を海外に伝える老師の努力、その深さ、その特性、その壮大さは独特である。老師がこの賞を受賞した機会に、心より深い祝意を表明するものであります。

老師は、55 歳のとき、名誉ある地位に安んじることなく、居心地のいい地位に腰を落ち着けることなく、全く反対のことをしたのである。老師は海外へ行き、自身を全く新しい教化の地平に投じたのである。このことを考えるだけでも、私は頭を垂れる思いにかられる。

最初から、才能ある若いアメリカ人が老師の周りに集まってきて、その数がだんだんと増えると、協力をして話し合いをして、ロサンゼルスのシマロンの臨済寺が、老師がアメリカに来て 6 年目に設立された。市の北東部の山間地にわけいって、老師はマウント・ボールディの森林に特別な修業センターを設けた。さらに、同じような修業センターをニューメキシコ州のジェメス・スプリングスの深い森の中に設立した。この 3 つの拠点を設立し、老師の活動の拠点となった。

老師の教化をうけた者の中には、法名を受けた者も少なくなかった。頭を剃り、禅の僧侶になり、黒の僧衣をまとった。この人たちの中には、故郷の町に帰って、老師の禅の傘下、自分たちの寺院を開いた。アメリカ、カナダ、ヨーロッパ中にこうした寺院がある。老師は、シマロンに坐って修行者を教化しているのではなく、そうではなくて、他のセンターを精力的にまわり、摂心を主宰し、老師の禅は世界中に広まった。

老師はキリスト教の修道院を訪れ、そこで摂心をとりおこなった。老師以外の誰であれ、このような異なる宗教的背景において摂心をとりおこなうという偉業は為しえなかったであろう。

1978 年の夏に私は初めて老師に会った。そのとき、二か月の修業期間の最中で、一般的な仏教徒の論題の講義をしてくれと招かれた。毎朝参禅があり、提唱もあった。提唱は、生き生きと、浮世離れすることなく語られた。これはもうひとつの承周老師の禅の特徴であり、他では決して出会うことはできない。

老師が健康でいられて、老師のもっとも名誉ある事業が拡大することを深く祈っております。

老師の受賞スピーチからの抜粋

私がアメリカに行ったのは妙心寺管長が命じたからだ。管長はこういった。「おい君！　そこに行きなさい！」　私はアメリカに妙心寺の末寺をつくることになった。

仏教を布教するということを言うとき、いったい何が仏教を生きるということを意味するのか、人生そのものが仏教である、そんな人生とはなにか、ということが問題となる。だから、アメリカに行って以来、行い続けていることは、仏教を生きるということだ。それ以外は何もしていない。

あらゆるものには故郷がある。この世に生をうけるとき、故郷において生をうける。故郷のない存在はない。海を渡ってアメリカにいったときでさえ、私は故郷を失わなかった。「決して故郷を失わない」という考え方を貫くと、「仏教を生きる」ということを理解する智慧を明らめることができる。私の教え、私の「仏教の布教」は、単純に、仏教を生きるという智慧を明らめる修業をすることである。他には何もない。この種の教えのためになされる務めに対する報酬や謝礼などは存在しない。

86 ページ　写真　注

日本、1996 年に仏教伝道功労章を受賞して。

後列　長尾雅人教授、老師、長尾夫人

前列　ジカン・コーエン、キドー和尚、オスカー・モレノ

87 ページ

臨済寺の管理委員会は、このアルバムの作成に寄与してくださった方に感謝します。私たちは、45 年の間、老師がアメリカで素晴らしい教化をしてくださり、私たち、即ち老師の修行者と臨済寺のサンガに自身を捧げて下さったことに感謝して、この記念アルバムを作成しました。老師の 100 歳をお祝いして、これからも老師とともに（人々を）導き続けていきたいと願っています。

ジェフ・グリーク
管理委員会委員長
臨済寺

88 ページ　文章

我々は完全に、無我の上に立つ歴史をたてねばならない。
我々は完全に、あらゆる局面で無我である儀礼をたてねばならない。
我々は完全に、どのような小さな隅までも、無我の愛である教えを伝えなくてはならない。
仏教には無我を明らめること以外の真理は何もない。

裏表紙

昔の師家方の影に心うたれて分かったことは、自我の滅却である。いまや自我の滅却から目覚めてみると、さあ、真の師はどこにいるのだろうか？　去来自由にして、完全な寂滅とともに動く。しかしそれでもなお、私自身は寂滅の中に到らなくてはならない。さて、何ができるのか？

2007 年 3 月 6 日　承周老師